

千葉県八千代市

権 現 後 遺 跡

－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－

2007

八千代市教育委員会



# 千葉県八千代市

## 権 現 後 遺 跡

－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－



2007

八千代市教育委員会



# 序 文

八千代市は千葉県北部に広がる下総台地の北西部に位置しています。下総台地は、印旛沼・手賀沼・利根川など豊かな水源と、一年を通しての温暖な気候を背景として、旧石器時代以来、多くの人々が生活を営んできました。こうした恵まれた自然環境のもと、八千代市においても、旧石器時代以来の多くの人々の生活の息吹が遺跡の発掘調査によって次第に明らかにされつつあります。

八千代市は東京より30km圏に位置する近郊住宅都市として全国でもまれに見る人口増加で急成長を遂げ、近年においては市内2ヶ所において大学と住宅地がセット開発され、学園都市としての側面もあわせ持つようになりました。このように急速に発展を遂げた八千代市ではありますが、市域中央を流れる新川沿いなどには、今なお、豊かな自然が残されています。これからも八千代市は水と豊かな環境を守りながら、着実に発展してゆくことと思われまます。

今回ここに報告いたします権現後遺跡は市域中央の萱田地区に位置し、付近には東葉高速鉄道八千代中央駅を中心としたゆりのき台の町並みが広がる、八千代市でも市街化の進んでいる地区に所在します。平成7年1月、この地に八千代市文化伝承館建設の計画がおこり予定地内に所在する埋蔵文化財について関係機関による慎重な協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に至り、記録保存の措置として、発掘調査を行うこととなりました。

八千代市内では、これまでも多くの遺跡の発掘調査が行われています。今回の調査では、古墳時代と奈良・平安時代の竪穴住居跡等が調査され、多くの成果を得ることが出来ました。本報告書が学術資料としてはもとより、教育資料として、そして地域の歴史に興味を持たれている方々に大いに活用されれば幸いです。また、埋蔵文化財についてより多くの方々の理解を深め、文化財保護についての関心を高めることに寄与できるよう願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書に至るまでの間、ご指導、ご助言を頂いた千葉県教育委員会及び関係諸氏、関係各機関の皆様方に深く感謝いたします。また、発掘調査、報告書作成作業に従事された調査補助員、整理補助員の方々にも深く御礼申し上げます。

平成19年3月30日

八千代市教育委員会  
教育長 萩原 康正

# 凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市萱田に所在する、権現後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、八千代市教育委員会が実施した。
3. 調査遺跡の所在地、期間、調査原因等は、下記のとおりである。

遺跡名 権現後遺跡  
所在地 八千代市萱田字権現後460 - 2 外  
調査期間 1995（平成7）年1月30日～1995（平成7）年3月31日（確認本調査）  
調査面積 1,020㎡  
調査原因 八千代市文化伝承館建設
4. 整理作業及び報告書作成作業は、2006年5月1日～2007年2月28日までの期間行った。
5. 本書の編集・執筆は、1章、3章1,2,3節を宮澤久史が、その他を伊藤弘一が行い、宮澤が総括した。遺物の写真撮影は宮澤が行った。
6. 出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。
7. 本書、図1に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図『佐倉』を基に作成した。
8. 本書、図2に使用した地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代都市計画基本図（平成13年修正）No.15を使用した。
9. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。

竪穴住居跡・土坑・・・1/60 溝・・・1/250  
須恵器・土師器・陶磁器・土師質土器・土製品・石製品・・・1/4  
縄文土器・弥生土器・・・1/3 古銭・・・1/1
10. 本書に使用したスクリーン表示は以下のとおりである。

//// //// 調査区 ■■■■ 焼土 ■■■■ 粘土 ▲▲▲▲▲▲ 貝
11. 発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会 八千代市立郷土博物館 峰村 篤 道上 文 鳴田浩司 村田一男  
中野修秀

# 目 次

序 文
凡 例
目 次
挿図目次
表 目次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と歴史的環境	2
第4節 調査の概要	5
第2章 調査された遺構と遺物	10
第1節 古墳時代	10
第2節 奈良・平安時代	22
第3節 近世	27
(1) 溝	27
(2) 土坑	29
第4節 遺構外	31
第3章 成果と課題	32
第1節 縄文時代	32
第2節 弥生時代	32
第3節 古墳時代	33
第4節 奈良・平安時代	35
第5節 近世	38

## 図 版

第8図 3号住居跡	16
第9図 3号住居跡(2)	17
第10図 3号住居跡(3)	18
第11図 4号住居跡	20
第12図 4号住居跡(2)	21
第13図 1号住居跡	23
第14図 1号住居跡(2)	24
第15図 1号住居跡(3)	25
第16図 1号溝状遺構	28
第17図 1号土坑・2号土坑	30
第18図 遺構外	31
第19図 2号住居跡同時期比較資料	34
第20図 関東托出土遺跡分布	36
第21図 関東出土托集成	36
第22図 権現後遺跡・菅地の台遺跡 遺構配置	37

## 表目次

表1 調査遺構一覧	7
表2 2号住居跡 遺物観察表	13
表3 3号住居跡 遺物観察表	15,18
表4 4号住居跡 遺物観察表	19
表5 1号住居跡 遺物観察表	26
表6 1号溝状遺構 遺物観察表	29
表7 遺構外 遺物観察表	31

## 挿図目次

第1図 権現後遺跡周辺地形図及び 周辺遺跡分布図	3
第2図 権現後遺跡における周辺地形図	5
第3図 遺構配置図及び基本層序	6
第4図 2号住居跡	11
第5図 2号住居跡(2)	12
第6図 2号住居跡(3)	13
第7図 2号住居跡(4)	14

# 第1章 序 説

## 第1節 調査にいたる経緯

平成6年11月、八千代市萱田字権現後460-2外の土地について、八千代市長から（仮称）伝統文化振興館（現、八千代市文化伝承館）建設工事に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡No.171権現後遺跡の範囲内であり、過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から、本照会地においても遺構が検出される可能性が高いと判断し、市教委は、八千代市長に対して、全域「遺跡有り」の回答を行い、建設にあたっては、発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後、市教委と関係諸部局の間で発掘調査実施の為の協議が進められ、平成6年12月に土木工事の通知及び発掘調査の通知が提出され、準備の整った平成7年1月30日から発掘調査が開始された。

確認調査は、まず、包含層の有無を確認するため1パーセント程度の試掘を行った。結果、包含層は検出されなかった。遺構確認については、調査対象面積が1,020㎡であること、隣接地の調査から遺構密度が高いこと等から、確認調査は行わず、全域を本調査対象面積とした。

以上の結果を受け、市教委と関係各部局との間で再び協議が進められ、埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り、記録保存の措置として、発掘調査を実施することとなった。このことを受け、市教委は、平成6年度の市費単独の直営調査として平成7年1月10日から実施することになった。

## 第2節 調査の方法と経過

調査は、調査区域約2/3について重機で表土除去作業を行った。廃土の処理については場内での処理を行った為、調査期間中にスイッチバックを行い、残り約1/3についても同様に重機で表土除去作業を行った。前後半ともに表土除去後、ソフトローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。撮影には、35mmモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては、調査区の形状に沿ってグリッドを設定した。設定にあたっては、5m単位で設定し、各グリッド杭を基準としながら、従来の遣り方実測を行った。3月31日に全景写真を撮影し、全工程を終了した。





### 第3節 遺跡の位置と歴史的環境

権現後遺跡（1）の所在する八千代市は、千葉県北西部に位置する。八千代市の地形は、印旛沼に西から注ぎ込む新川と支流の神崎川・桑納川・高津川等の河川により、複雑な樹枝状の谷津が発達する台地により形成される。台地の一般的傾向として、南側は急傾斜で、北側は段丘状の地形を形成している。台地の標高は、14～30mで、東京湾分水界を起点として南西部で高く、北から東にかけて徐々に低くなる。

権現後遺跡は、市域中央の萱田地区に所在する。本遺跡が所在する台地は、新川と桑納川によって大きく区切られ、更に南側を小支谷（須久茂谷津）によって区切られている。標高は約22mで、新川の低地からの比高差は13～14mである。昭和50年代～60年代に財団法人千葉県文化財センター（以下、「県センター」と略）によって調査された萱田遺跡群の一部をなす遺跡で、今回の調査地点は、「県センター」調査地点の隣接地、権現後遺跡の南東端に位置する。また、西側に隣接するヲサル山遺跡（2）と北東側に隣接する菅地ノ台遺跡（48）は、地形的な大きな隔たりはなく、本来は、同一の遺跡として捉え分析することが有効と思われる。

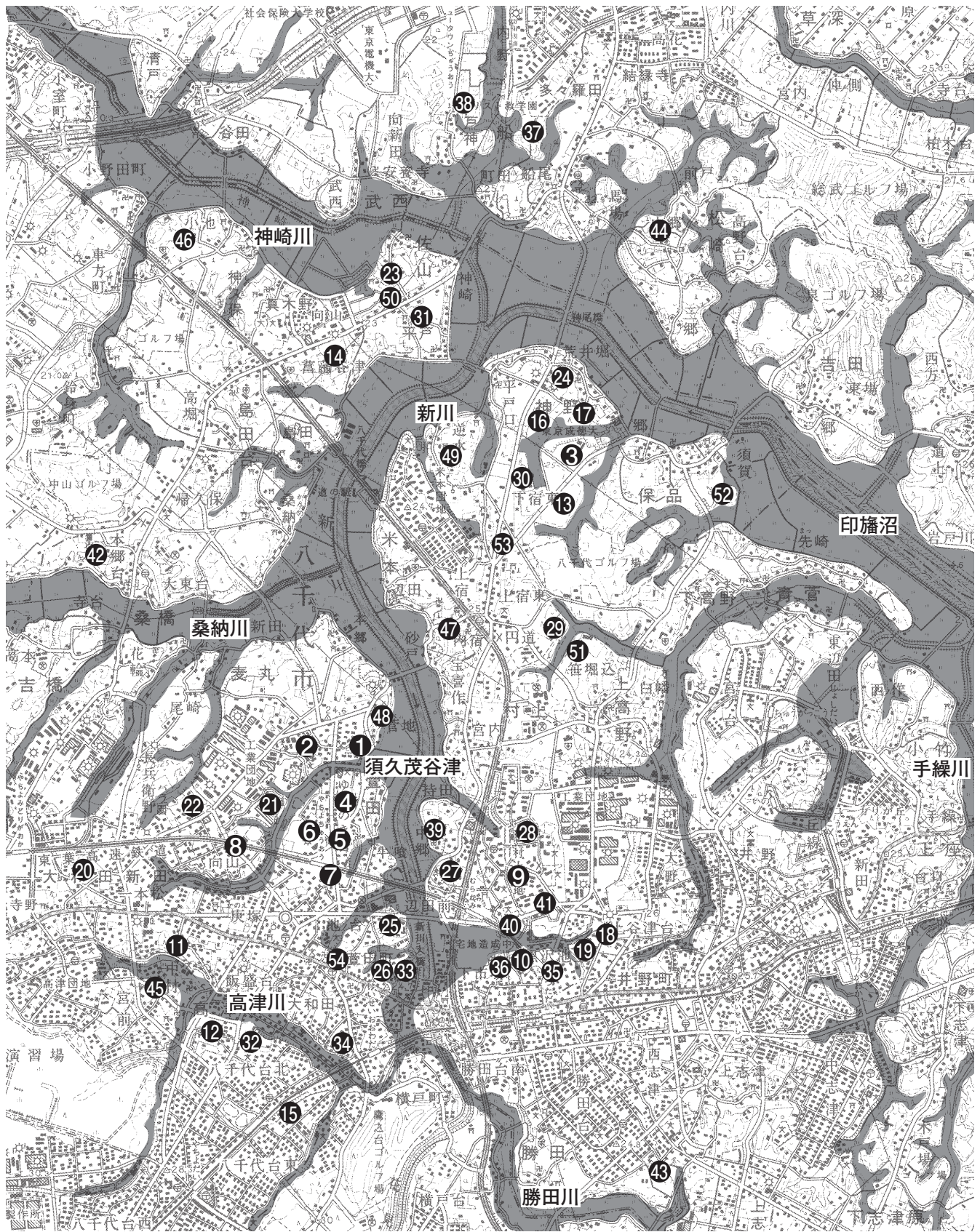
今回の調査地点で検出された主な遺構としては、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、近世の溝1条であるが、周囲は「県センター」によって広範囲に調査が実施され、遺跡全体のなかでどのように位置付けられるのか時代ごとに概観してみる。

旧石器時代は、6つの文化層、ブロック24ヶ所を検出している。出土遺物として最も古い文化層から局部磨製石器が出土している。縄文時代については、遺構は検出していないが、早期、後期を中心に早・前・中・後期にわたる縄文土器が出土している。権現後遺跡出土の撚糸文土器（井草Ⅰ）は、八千代市内において最古級の撚糸文土器となる。弥生・古墳時代では、弥生後期に市内でも有数の集落跡が展開する。全体として73軒の竪穴住居跡、3基の方形周溝墓が調査され、市内では、92軒を検出した栗谷遺跡（3）に次ぐ規模である。古墳前期では32軒の竪穴住居が調査されている。古墳時代中期以降、集落の規模が縮小する。中期においては、5軒の竪穴住居跡が調査され、内、4軒が石製模造品の工房跡であった。古墳時代後期では、10軒の竪穴住居跡が調査され、今回の調査によって新たに3軒が加わったことになる。奈良・平安時代に至ると集落の規模は再び拡大し、竪穴住居跡68軒、掘立柱建物跡17棟を検出している。また、特筆すべきは、長文の墨書土器、人名、紀年名が書かれた墨書土器などが複数出土していることで、古代下総國印旛郡の地域研究に多大な資料を提供している。また、古代以降では、近世の土坑1基と時期不明の溝が報告されている。今回の調査においても溝1条、土坑2基が調査されている。

次に周辺の遺跡について、八千代市を中心に簡単にまとめてみたい。

**旧石器時代** 権現後遺跡を含む萱田遺跡群ではヲサル山遺跡、北海道遺跡（4）井戸向遺跡（5）坊山遺跡（6）白幡前遺跡（7）で多くの石器群が調査されている。萱田遺跡群から距離を隔てるが、向山遺跡（8）でも遺物集中地点を確認している。新川を挟んだ対岸に位置する村上込ノ内遺跡（9）では、Ⅲ層の礫群が、沖塚遺跡（10）では、3つのブロック群が検出されている。高津川流域においては、一本松前遺跡（11）、高津新山遺跡（12）で遺物集中地点が検出されている。

**縄文時代** 早期の遺跡として、隣接のヲサル山遺跡が挙げられ、19基の炉穴、1基の陥穴が検出された。その他に上谷遺跡（13）、間見穴遺跡（14）等があり、多数の炉穴を検出している。その他に大溜入遺跡（15）、沖塚遺跡等で陥穴を検出されている。また、早期撚糸文系土器、条痕文系土器を出土した遺跡に、前述の上谷遺跡、間見穴遺跡に加え向境遺跡（16）、境堀遺跡（17）等を挙げることができる。前期の遺構を調査した遺跡として二重堀遺跡（18）、黒沢池上遺跡・新林遺跡（19）、ライノ作南



- |               |            |            |            |                 |             |             |
|---------------|------------|------------|------------|-----------------|-------------|-------------|
| 1. 権現後遺跡      | 2. ヲサル山遺跡  | 3. 栗谷遺跡    | 4. 北海道遺跡   | 5. 井戸向遺跡        | 6. 坊山遺跡     | 7. 白幡前遺跡    |
| 8. 向山遺跡       | 9. 村上遺跡群   | 10. 沖塚遺跡   | 11. 一本松前遺跡 | 12. 高津新山遺跡      | 13. 上谷遺跡    | 14. 間見穴遺跡   |
| 15. 大溜入遺跡     | 16. 向境遺跡   | 17. 境堀遺跡   | 18. 二重堀遺跡  | 19. 黒沢池上遺跡・新林遺跡 | 20. ライノ作南遺跡 | 21. ヲサル山南遺跡 |
| 22. 長兵衛野南遺跡   | 23. 佐山貝塚   | 24. 神野貝塚   | 25. 川崎山遺跡  | 26. 上ノ山遺跡       | 27. 浅間内遺跡   | 28. 名主山遺跡   |
| 29. 阿蘇中学校東側遺跡 | 30. 役山東遺跡  | 31. 道地遺跡   | 32. 内込遺跡   | 33. 上ノ山古墳       | 34. 壇場台古墳   | 35. 黒沢台古墳   |
| 36. 沖塚古墳      | 37. 船穂白幡遺跡 | 38. 鳴神山遺跡  | 39. 正覚院館跡  | 40. 村上第1塚群      | 41. 村上第2塚群  | 42. 本郷台遺跡   |
| 43. 新境原遺跡     | 44. 前戸遺跡   | 45. 高津館遺跡  | 46. 作山遺跡   | 47. 米本城跡        | 48. 菅地ノ台遺跡  | 49. 逆水遺跡    |
| 50. 田原窪遺跡     | 51. 平沢遺跡   | 52. おおびた遺跡 | 53. 下宿東遺跡  | 54. 北裏畑遺跡       |             |             |

S = 1 / 50,000

第1図 権現後遺跡 周辺地形図及び周辺遺跡分布図

遺跡等(20)がある。沖塚遺跡、向山遺跡では、前期から中期にかけての包含層が確認された。中期の住居跡として阿玉台式期の竪穴住居跡をヲサル山遺跡で1軒、ヲサル山南遺跡(21)で8軒検出している。その他に中期の竪穴住居が調査された遺跡として坊山遺跡で1軒、黒沢池上・新林遺跡で1軒、高津新山遺跡で2軒等が挙げられる。加曾利E式期の遺跡として長兵衛野南遺跡(22)がある。また、中期から後期に中心をおく貝塚として、佐山貝塚(23)、神野貝塚(24)がある。後期堀之内式期の遺物を出土する遺跡に本郷台遺跡(42)、加曾利B式期の遺跡として新東原遺跡(43)がある。

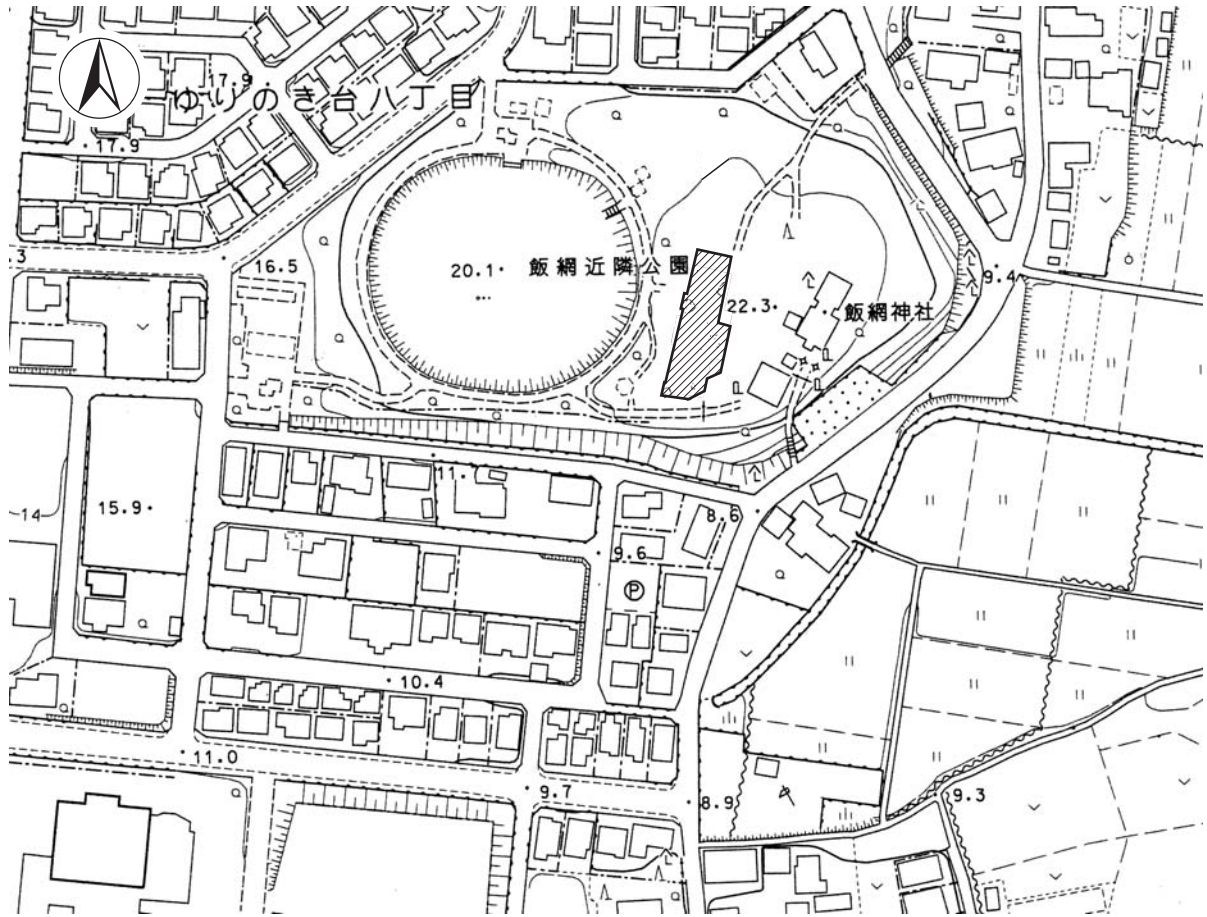
**弥生時代** 今回の調査地点で、弥生時代の遺構の検出はされなかったが、本来、権現後遺跡の中心的な時代であり、周辺遺跡を含め、弥生時代～古墳前期の遺跡が八千代市内で大きく展開する。中期宮ノ台式期にあっては、前述の栗谷遺跡、米本地区の逆水遺跡(49)、佐山地区の田原窪遺跡(50)等が展開する。後期に至ると本遺跡が所在する萱田遺跡群の中では、ヲサル山遺跡、白幡前遺跡、井戸向遺跡、北海道遺跡、権現後遺跡、から合計、172軒の後期～古墳前期の住居跡が報告されている。さらに萱田遺跡群の南側の小支谷を隔て、川崎山遺跡(25)で26軒、上ノ山遺跡(26)で弥生時代後期5軒の住居が調査されている。また、新川を挟んだ対岸にあたる村上遺跡群では、村上込ノ内遺跡で後期の住居跡14軒が調査され、その周辺遺跡である、浅間内遺跡・沖塚遺跡(27)、名主山遺跡(28)でも住居跡が検出されている。沖塚遺跡では、八千代市において最古段階の弥生中期前半期の土器が出土している。また、上高野地区には後期の住居跡10軒をした平沢遺跡(51)、阿蘇地区には阿蘇中学校東側遺跡(29)、保品・神野地区には1遺跡で92軒を検出した栗谷遺跡、その周辺遺跡として役山東遺跡(30)、境堀遺跡、上谷遺跡、おおびた遺跡(52)が所在し、佐山地区に道地遺跡(31)等がある。

**古墳時代** 集落としてまとまった軒数が検出されている遺跡をみってみる。中期で北海道遺跡22軒、後期で内込遺跡(32)20軒の住居跡が確認されている。また、中期～後期の遺跡として向境遺跡では、調査された住居跡は5軒であるが、カマド出現前後の状況を知る上で良好な資料を提供している。権現後遺跡、北海道遺跡、更に、川崎山遺跡h地点では石製模造品工房跡が検出されている。

周辺の古墳として、大和田地区に箱式石棺のみの調査の堰場台古墳(34)、村上地区に黒沢台古墳(35)の方墳、沖塚古墳で円墳(36)が分布していた。

**奈良・平安時代** 8世紀後半から9世紀にかけて集落が大規模に形成され、新川中流域に展開する萱田遺跡群・村上遺跡群は『和名類聚抄』にある「下総國印波郡村神郷」に比定されている。多量の文字資料、仏教的遺物、生産・生活・儀礼などに関わる鉄器が出土し、竪穴住居跡以外に掘立柱建物跡・手工業生産を行った遺構が調査されている。新川を下り、印旛沼西部南岸には、上谷遺跡、栗谷遺跡、向境遺跡が、西部北岸には船穂白幡遺跡(37)、鳴神山遺跡(38)が所在し、小規模な調査ながら瓦塔を出土した前戸遺跡(44)があり、各遺跡の分析から大規模な地域の開発の様相がうかがえる。

**中世・近世** 中世では、館跡として土塁・堀の遺構が検出され、康応2(1390)年銘の武蔵型板碑、北宋銭、陶磁器片等が出土した正覚院館跡(39)や高津館跡(45)、中世の土坑墓群が調査された作山遺跡(46)がある。戦国期には、権現後遺跡の対岸に米本城跡(47)があり、米本城に関連する遺跡として下宿東遺跡(53)がある。近世では、萱田町に所在する北裏畑遺跡(54)がある。また、近世に構築されたと考えられる村上第1塚群(40)村上第2塚群(41)は、塚の形態・規模・盛土等に共通点はみられず、古銭・小皿・珠子玉などが出土している。遺構の性格については不明とされているが、村ないしは部落全体の共通目的下にあった民間信仰に関連する所産ではないかと推察している。



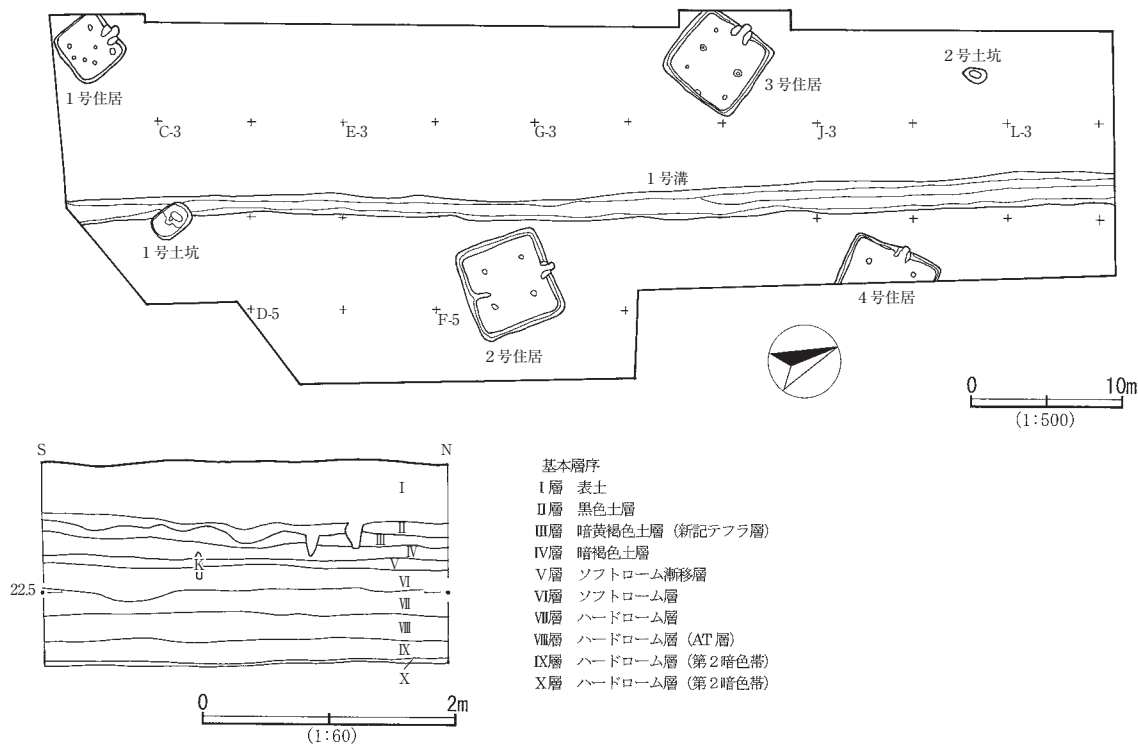
第2図 権現後遺跡における周辺地形図

#### 第4節 調査の概要

本節では、権現後遺跡及び周辺遺跡について過去の調査履歴について触れておく。権現後遺跡については、萱田地区の区画整理事業に伴い実施された「県センター」による調査が大部分を占めている。詳細は前述のとおりである。その後、未承諾地についての調査に関して、別冊の報告書が刊行され、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟が追加されている。

隣接するヲサル山遺跡では、旧石器時代の4つの文化層、合計29ヶ所のブロックが調査された。縄文時代は早期の炉穴19基、陥穴1基、中期阿玉台式期の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、後期の竪穴住居跡3軒が調査され、出土遺物としては、中期、後期を中心に早期～晩期に至る土器が出土している。また、土製品として74点の土器片錘が出土している。弥生・古墳時代では、竪穴住居跡34軒、方形周溝墓3基、土坑墓1基が調査された。遺物としては、ヲサル山遺跡出土の方形周溝墓主体部から鉄釧が出土していることは注目される。奈良・平安時代には検出遺構が激減し、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟に留まるようになる。この状況は、権現後遺跡が奈良・平安時代に遺構数が飛躍的に延びるのとは対照的である。

また、権現後遺跡の北東に隣接する遺跡として菅地ノ台遺跡がある。「市教委」によって断続的に調査され、昭和62年度には、菅地ノ台古墳を、平成元年度には竪穴住居跡10軒（弥生時代2軒、古墳時代中期5軒、奈良・平安時代3軒）掘立柱建物跡3棟（奈良・平安時代）を調査している（a地点）。報告書は未刊であるが、平成7～9年度にかけても断続的な調査を行い縄文時代の陥穴1基、弥生時代の竪穴住居跡3軒、方形周溝墓1基、古墳時代の竪穴住居跡3軒（前期2、中期1）、古墳周溝1基（中期）を調査した。奈良・平安時代になると遺構検出数が増え、竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡13棟等が調査されている（c地点）。平成16年には溝1条を調査している（d地点）。これらの調査の遺構配置から菅地ノ台遺跡は、ヲサル山遺跡とともに、権現後遺跡と一帯の遺跡であることが明らかにされつつ



第3図 遺構配置図及び基本層序

あり、ヲサル山遺跡とは対照的に、弥生時代の遺構数は少なく、奈良・平安時代に至り遺構数が増大する状況が見えてくる。今後、権現後遺跡の分析をする上で重要な遺跡となるであろう。過去の調査概要を一覧したものが表1となる。

今回の調査地点は、権現後遺跡の範囲内でも南東端に位置し、萱田地区に所在する飯綱神社境内に当たる。検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、近世の溝1条、土坑2基である。旧石器時代に関しては、テストピット3ヶ所、12㎡を調査したが、遺物は出土しなかった。縄文時代以降の遺物は、検出遺構の時代に相当する土器、土製品、石製品等が出土した。出土量としては、全体に少量であった。縄文時代等の検出遺構にない時期の遺物も、遺構覆土中から若干出土しているが、それらは、遺構外遺物として節を改め報告することにした。遺構配置については、上図の遺構配置図のとおりである。上図が示すとおり、遺構は調査地区外にも広がっていることが判る。

また、基本層序であるが、調査区西側の際で分層を行い、上図に示したとおりである。縄文土器等の遺物包含層は検出されなかったが、全体として良好な堆積状況を示していた。遺構確認は、VI層、ソフトローム上面で行った。

表1 調査遺構一覧

遺跡名	縄文					弥生・古墳			奈良・平安
	早期	前期	中期	後期	晩期	後期・前期	中期	後期	
菅地ノ台	陥穴 1	-	-	-	-	住居 7 周溝墓 1	住居 6 周溝 2	0	住居 26 掘立柱 16
権現後 (県センター)	○	○	○	○	-	住居 73 周溝墓 3	住居 5	住居 10	住居 67 掘立柱 17
権現後 (追加分)	-	-	-	-	-	-	-	-	住居 1 掘立柱 4
権現後 (今回調査)	○	-	-	○	-	○	-	住居 3	住居 1
ヲサル山	炉穴 19 陥穴 1	○	住居 1 小堅穴 1 ピット 1	住居 3	○	住居 34 周溝墓 3	-	-	住居 2 掘立柱 1

※○は出土遺物あり

〔権現後周辺遺跡引用文献〕

- (1) 加藤修司他1984『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター  
大野康男 1994『八千代市権現後・北海道・井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (2) 藤岡孝司他1986『八千代市ヲサル山遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (3) 宮澤久史他2004『栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会
- (4) 阪田正一他1985『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (5) 藤岡孝司他1987『八千代市井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (6) 大野康男 1993『八千代市坊山遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (7) 大野康男他1991『八千代市白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (8) 大鷹依子他1994『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他』（財）千葉県文化財センター
- (9) 天野努 他1974『八千代市村上遺跡群』（財）千葉県都市公社
- (10) (8)に同じ
- (11) 八千代市教育委員会2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』
- (12) 朝比奈竹男他1982『千葉県八千代市高津新山遺跡』八千代市教育委員会
- (13) 朝比奈竹男他2005『上谷遺跡』八千代市遺跡調査会
- (14) 田中裕 他2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3 - 八千代市間見穴遺跡 - 』（財）千葉県文化財センター
- (15) 関俊彦 他1982『千葉県八千代市大溜入遺跡発掘調査報告書』大溜入遺跡調査会
- (16) 宮澤久史 2004『向境遺跡』八千代市遺跡調査会  
加藤修司 1998『八千代市向境遺跡』（財）千葉県文化財センター
- (17) 宮澤久史 2005『境堀遺跡』八千代市遺跡調査会

- (18) 八千代市教育委員会1995『平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報』
- (19) 森竜哉 他2003『千葉県八千代市黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (20) 森竜哉 1996『仲ノ台遺跡・ヲイノ作南遺跡他発掘調査報告書』  
八千代市西八千代遺跡群調査会  
森竜哉 2000『ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (21) 八千代市史編纂委員会1991『八千代市の歴史 原始・古代・中世』
- (22) 森竜哉 2000『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (23) (21) に同じ
- (24) (21) に同じ
- (25) 川崎山遺跡関連文献  
a 地点 平岡和夫他 1979『萱田町川崎山遺跡』 八千代市遺跡調査会  
b 地点 八千代市教育委員会2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』  
c 地点 小川和博他 1999『千葉県八千代市川崎山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』  
八千代市川崎山遺跡調査会  
d 地点 常松成人・川口貴明2003『千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点』 八千代市遺跡調査会  
e 地点 八千代市教育委員会1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』  
f 地点 八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』  
g 地点 八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』  
h 地点 森竜哉 2004『千葉県八千代市川崎山遺跡h地点』 八千代市遺跡調査会  
i 地点 八千代市教育委員会2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』  
j 地点 八千代市教育委員会2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』  
k 地点 伊藤弘一・宮澤久史2006『千葉県八千代市川崎山遺跡 k 地点』 八千代市遺跡調査会
- (26) 武藤健一・深谷昇2000『千葉県八千代市上ノ山遺跡 b・c 地点発掘調査報告書』  
上ノ山遺跡調査会 八千代市遺跡調査会
- (27) 浅間内遺跡・沖塚遺跡関連文献  
常松成人他2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』  
常松成人他2002『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』  
常松成人 2003『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』八千代市教育委員会  
常松成人 2007『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』八千代市教育委員会  
中野修秀他2007『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市遺跡調査会
- (28) 平野元三郎1972『名主山遺跡』名主山遺跡発掘調査団
- (29) 佐藤克己他1980『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会  
藤原均 他1984『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会
- (30) (3) に同じ
- (31) 林勝則 1986『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会  
田中裕 他2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2 - 八千代市道地遺跡 -』  
(財) 千葉県文化財センター
- (32) 森竜哉 他2001『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会  
森竜哉 他2003『千葉県八千代市内込遺跡b地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (33) (9) に同じ

- (34) 秋山利光他2002『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書 堰場台古墳 真木野古墳』  
八千代市教育委員会
- (35) (21) に同じ
- (36) (21) に同じ
- (37) 糸川道行 2004『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI－印西市船尾白幡遺跡－』  
(財)千葉県文化財センター
- (38) 田形孝一他1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書－印西市鳴神山  
遺跡・白井谷奥遺跡－』(財)千葉県文化財センター
- (39) 八千代市教育委員会2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』  
八千代市教育委員会2006『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成17年度』
- (40) (9) に同じ
- (41) (9) に同じ
- (42) 伊藤弘一他2004『高津館跡b地点・本郷台遺跡』八千代市教育委員会
- (43) 常松成人 2004『新東原遺跡a地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (44) 伊藤弘一 2005『前戸遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- (45) (42) に同じ
- (46) 森竜哉 2003『作山遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
- (47) (21) に同じ
- (48) 菅地ノ台遺跡関連文献  
八千代市教育委員会1988『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 昭和62年度』  
八千代市教育委員会1990『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成元年度』  
八千代市教育委員会2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』  
八千代市教育委員会1996『八千代市埋蔵文化財調査年報－平成6年度版－』  
八千代市教育委員会1997『八千代市埋蔵文化財調査年報－平成7年度版－』
- (49) 逆水遺跡関連文献  
八千代市教育委員会1996『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』  
八千代市教育委員会2003『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』  
八千代市教育委員会2004『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』  
八千代市教育委員会2007『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』
- (50) (18) に同じ
- (51) 八千代市教育委員会1997『八千代市埋蔵文化財調査年報－平成7年度版－』
- (52) 中山吉秀他1975『おおびた遺跡』おおびた遺跡調査団・八千代市教育委員会
- (53) 八千代市教育委員会2002『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』
- (54) 八千代市教育委員会2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』  
下宿東遺跡が米本城関連遺跡であることは、遠山成一氏のご教示による。



## 第2章 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は古墳時代の竪穴住居3軒、奈良・平安時代の竪穴住居1軒、近世の溝1条、土坑2基である。古墳時代の3軒の竪穴住居跡については、全て、古墳時代後期に属するもので、カマドを持つものである。「県センター」調査の古墳時代第I群の遺構群の続きに相当するもので、「県センター」調査での古墳時代第I群の2軒に新たに3軒を加えることになる。奈良・平安時代の1軒についても、同様に「県センター」調査の歴史時代第I群の遺構群の近接の位置にある。

### 第1節 古墳時代

#### 1. 2号住居跡（第4図、5図、6図、7図）

検出地区 F-4G、F-4Gに位置し、調査区東側に所在し西側を1号溝と僅かに接している。新旧関係は本住居跡の方が古い。

遺構 長軸5.2m×短軸5.1m。深さ0.4mの方形の竪穴住居跡である。床はソフトローンをよく踏み固めた床で平坦である。住居跡中央部に広範囲に硬化面が広がる。壁もローンの壁でほぼ垂直に立ち上がる。覆土下層から床面にかけて少量の焼土がひろがる。比較的、住居壁際をめぐるように固まった焼土が点在する。遺構の一部に攪乱が存在した。

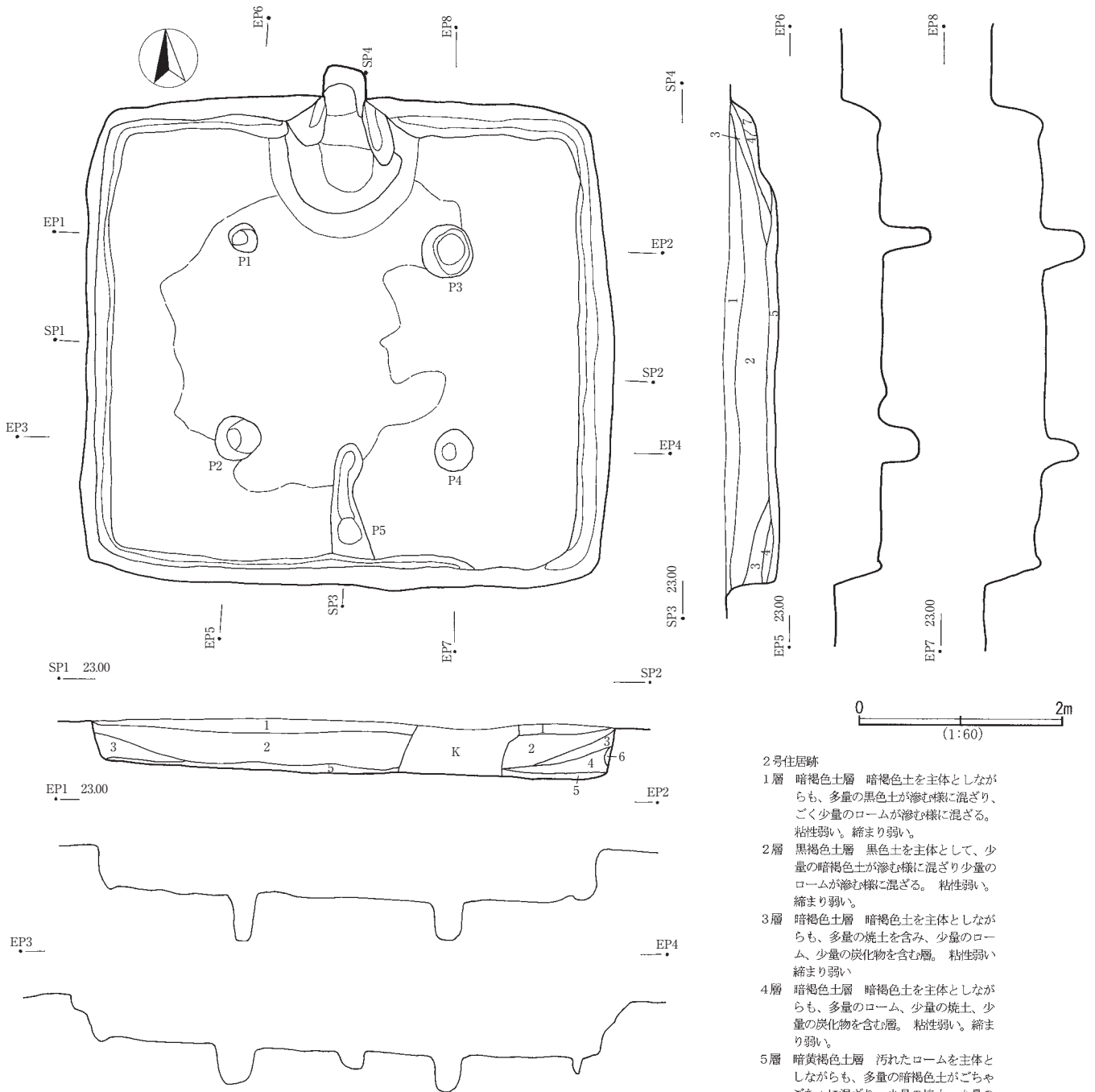
付属施設 柱穴はP1～P4でP5は出入り口施設と考えられ、浅い溝がともなう。柱穴の直径は0.3～0.5m、深さは0.3～0.4mを測る。柱穴の底面から、あたりのような痕跡は認められない。柱穴の間隔は、ほぼ2mの等間隔である。周溝は、ほぼ全周するものの、カマドの下では、めぐらない。幅0.2～0.3m、深さ約0.1mのしっかりとした溝であった。

カマド 住居跡北壁ほぼ中央に位置し、両袖とも残り、遺存状況は良好である。火床部から煙道部まで1.7m、袖部長さ0.5～0.6mである。火床部から燃焼部は、段が上がるテラス状の面を作り、煙道部は角度をもって立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。砂質粘土で構成されている。3、4、5層は天井部が崩落した層である。

覆土 基本は5層に分層される。3、4、5層は人為的な埋め戻しと考えられ、住居廃材等を燃やした為、焼土が形成された。その後の1・2層は、自然堆積の埋没過程が観察できた。

遺物 住居全体の覆土上層から下層にかけて、少破片が比較的多く出土した。出土遺物は、土師器、坏・甕・甑により構成される。1は、打ち欠いたような底部が下になり、ななめになった状態で出土した坏である。10は、口縁を伏せた状態でカマド脇の床面から出土した甑であり、中には、2・4が入れ子状に入っていた。口縁が強く外反し胴部はそれほど張らない。2は、有段口縁坏で床面の出土。4の小型甕は、口縁を伏せた逆位の状態で出土した。小型甕は、口縁が直立する4と、くの字を呈する5・6の形態がみられる。7・8はカマド内から口縁を住居中央に向け横並びで出土した甕である。カマド掛口に7・8を据え、住居の焼却廃絶後カマドが崩壊し、住居中央へ倒れこんだ状況が想定できる。7・8・4・10は、調査時の所見から住居廃絶時に整然と据え置かれていた状況が判断できる。12の支脚は、カマド内、7・8の下から出土した。丁寧にミガキあげている11の土製紡錘車は、住居南西の床面から出土した。

所見 出土遺物から古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。

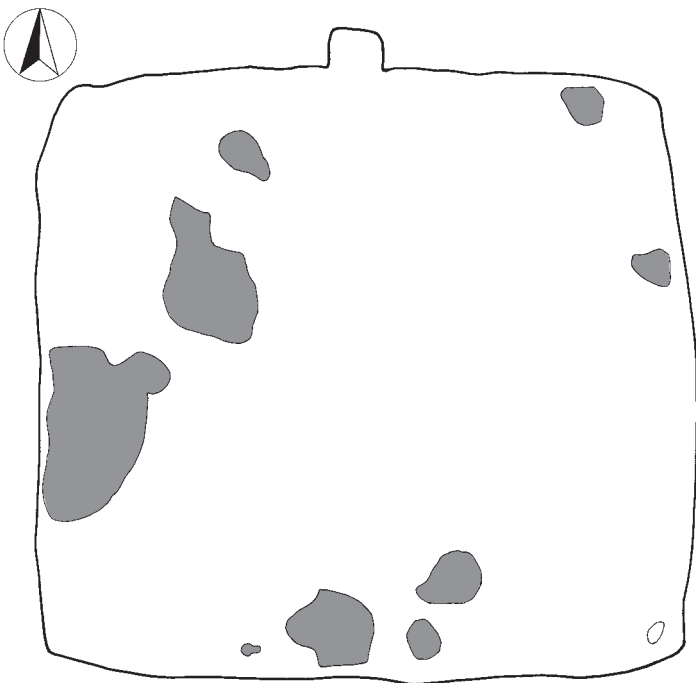
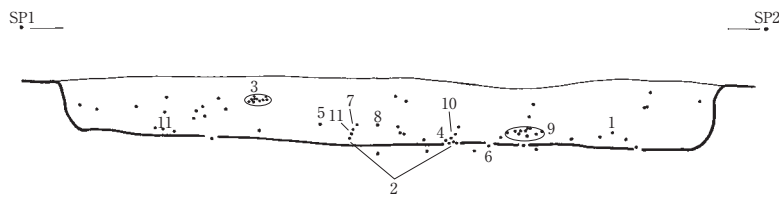
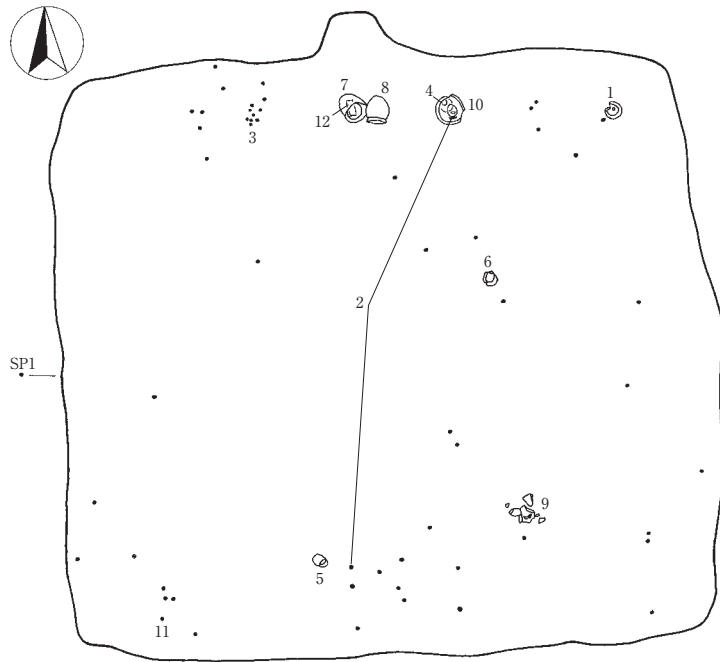


2号住居跡

- 1層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量の黒色土が滲む様に混ざり、ごく少量のロームが滲む様に混ざる。粘性弱い。締まり弱い。
- 2層 黒褐色土層 黒色土を主体として、少量の暗褐色土が滲む様に混ざり少量のロームが滲む様に混ざる。粘性弱い。締まり弱い。
- 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量の焼土を含み、少量のローム、少量の炭化物を含む層。粘性弱い。締まり弱い。
- 4層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量のローム、少量の焼土、少量の炭化物を含む層。粘性弱い。締まり弱い。
- 5層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体としながらも、多量の暗褐色土がごちゃごちゃに混ざり、少量の焼土、少量の炭化物を含む層。粘性弱い。締まり弱い。
- 6層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体とした層で、壁崩壊層である。粘性弱い。締まり弱い。
- 7層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量の白色粘土が滲む様に混ざり少量の焼土、ロームを含む層。カマド崩壊に伴う層である。粘性弱い。締まり弱い。

(3、4、5、層は人為的な埋戻しと考えられ その時に住居廃材等を燃やしていた為焼土が形成されたものと考えられ、その後2層、3層は、自然堆積によって埋まったものと考えられる。)

第4図 2号住居跡

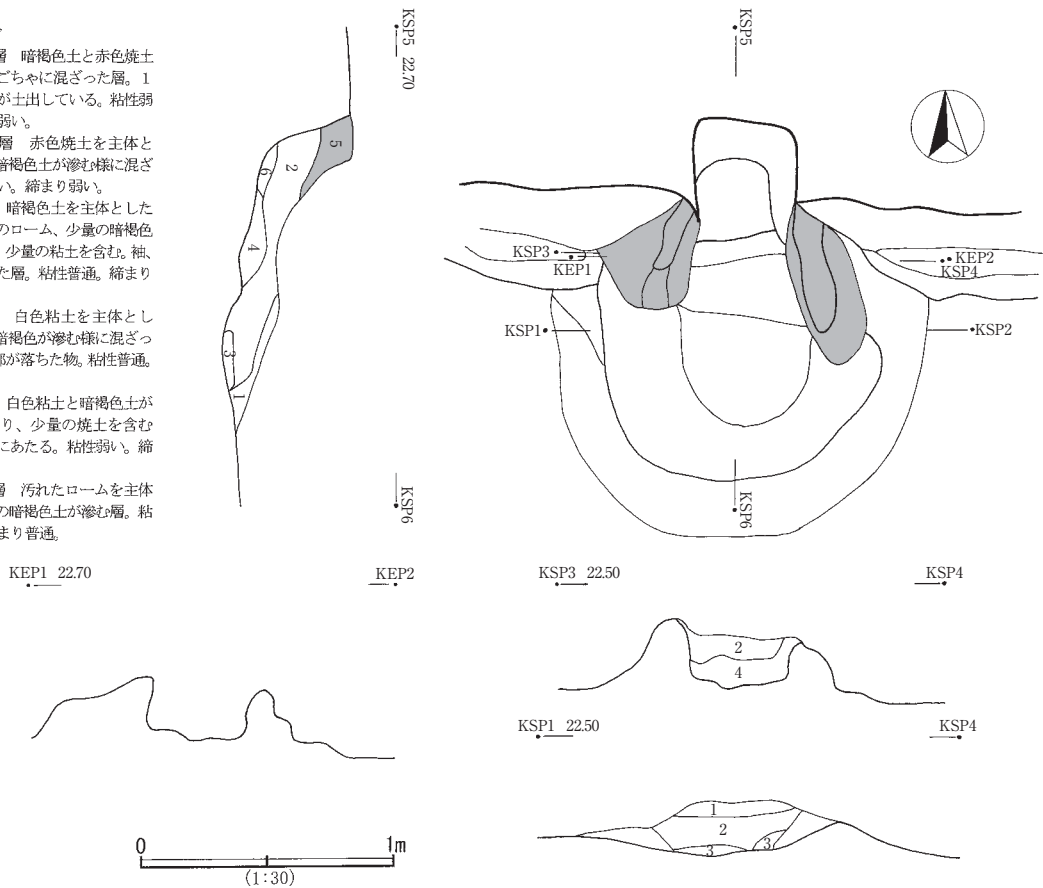


0 2m  
(1:60)

第5図 2号住居跡(2)

2号住居跡 カマド

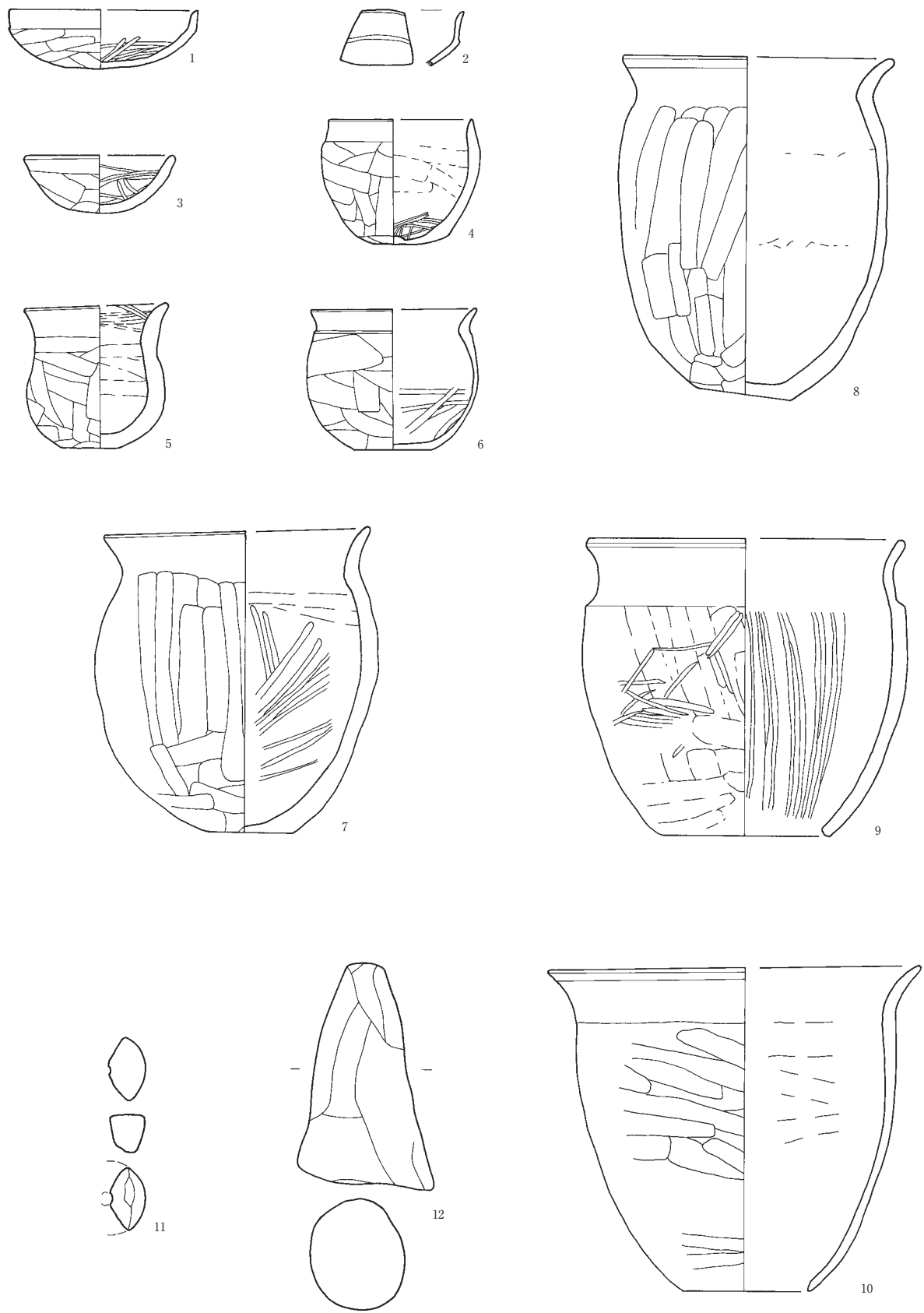
- 1層 暗赤褐色土層 暗褐色土と赤色焼土が、ごちゃごちゃに混ざった層。1層中に支脚が土出している。粘性弱い。締まり弱い。
- 2層 暗赤褐色土層 赤色焼土を主体とし、少量の暗褐色土が滲む様に混ざる。粘性弱い。締まり弱い。
- 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量のローム、少量の暗褐色土が滲む層。少量の粘土を含む。袖、天井が壊れた層。粘性普通。締まり普通。
- 4層 灰褐色土層 白色粘土を主体として、少量の暗褐色土が滲む様に混ざった層。天井部が落ちた物。粘性普通。締まり普通。
- 5層 灰褐色土層 白色粘土と暗褐色土が均一に混ざり、少量の焼土を含む層。天井部にあたる。粘性弱い。締まり普通。
- 6層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体とし、少量の暗褐色土が滲む層。粘性弱い。締まり普通。



第6図 2号住居跡 (3)

表2 2号住居跡 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	土師器 坏	口径 12.9 器高 4.0 底径 -	略完形	橙褐色	黒色砂粒少量	良	口縁直立 底部丸底 外面 口辺変化点ヘラによる沈線 体部横位ヘラケズリ 内面 上半ナデ 下半ヘラミガキ	底部中央 打ち欠いたような痕跡
2	土師器 坏	口径 - 器高 - 底径 -	口縁片	橙褐色	砂粒少量	普	外面 口縁ナデ 体部ヘラケズリ→ナデ 内面 口縁～体部ナデ	精製された胎土
3	土師器 坏	口径 (10.3) 器高 (3.9) 底径 (2.0)	1/4	外面 黒褐色 ～暗褐色 内面 黒褐色	緻密	普	外面 口縁ナデ 体部～底部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	内面黒色処理
4	土師器 小型甕	口径 10.0 器高 8.4 底径 3.5	完形	黒褐色	緻密	普	外面 口縁ナデ 胴部斜位ヘラケズリ 内面 口縁ナデ 胴部ヘラナデ 底部ヘラミガキ	内面黒色処理
5	土師器 小型甕	口径 9.7 器高 9.8 底径 3.4	完形	橙褐色	緻密	普	外面 口縁～頸部ナデ 胴部ヘラケズリ 内面 口縁～頸部ヘラミガキ 胴部ヘラケズリ	外面底部 ススらしきもの付着
6	土師器 小型甕	口径 11.3 器高 9.5 底径 5.3	4/5	外面 暗褐色 ～黒褐色 内面 褐色	緻密	普	外面 口縁～頸部ナデ 胴部上半横位ヘラケズリ 下半縦位ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 口縁～胴部横位ヘラミガキ	外面 ススらしきもの付着
7	土師器 甕	口径 18.2 器高 20.8 底径 5.4	完形	褐色	白色砂粒 赤色砂粒各少量	普	外面 口縁～頸部ナデ 胴部上半縦位ヘラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面 口縁ナデ 胴部ヘラケズリ→斜位ヘラミガキ	
8	土師器 甕	口径 18.2 器高 23.3 底径 6.3	完形	褐色	白色砂粒 赤色砂粒各少量	普	外面 口縁～頸部ナデ 胴部縦位ヘラケズリ 内面 口縁～胴部上半ナデ 胴部中位～下端ヘラケズリ→横ナデ	
9	土師器 甕	口径 21.7 器高 20.2 底径 -	1/4 口縁 ～胴部	暗褐色	白色砂粒 赤色砂粒各少量	普	外面 口縁ナデ 胴部縦位ヘラケズリ→横位ヘラミガキ 内面 口縁～頸部ナデ 胴部縦位ヘラミガキ	単口タイプ
10	土師器 甕	口径 25.5 器高 22.0 底径 -	略完形	外面 橙褐色 ～黒褐色 内面 橙褐色	黒色砂粒 赤色砂粒各少量	普	外面 口縁ナデ 胴部横位ヘラケズリ 内面 ナデ	単口タイプ
11	紡錘車 土製品	下部幅 (5.0) 高さ 2.7 孔径 (0.8)	破片1/5	褐色	緻密	良	ヘラケズリ→丁寧なミガキ 重さ 20g	
12	土製品 支脚	全長 15.4 器高 9.2	略完形	暗褐色	砂粒を多く含み、粗い	悪	重さ 770g	



0 10cm  
(1:4)

第7图 2号住居跡(4)

## 2. 3号住居跡（第8図、9図、10図）

検出地区 H-2G、I-2Gに位置し、調査区西側に所在し、単独で検出された遺構である。

遺 構 長軸4.8m×短軸4.2m。深さ0.5mの方形の竪穴住居跡である。床はソフトローンをよく踏み固めた床で平坦である。住居跡の柱の間に硬化面が広がる。壁もローンの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

付属施設 柱穴はP1～P7で、P3は出入口施設と考えられる。柱穴の直径は0.15～0.3m、深さは0.1～0.25mを測る。柱穴はおおむね浅い。柱穴の間隔は、長軸方向およそ1m、短軸方向およそ2mである。周溝は、全周し、幅0.15～0.3m、深さ約0.1mのしっかりとした溝であった。

カマド 住居跡北壁ほぼ中央に位置し、両袖とも残り、遺存状況は良好である。火床部から煙道部まで1.1m、袖部長さ0.6～0.8mである。火床部から燃焼部は、平坦な面を作るが、煙道部は角度をもって立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。砂質粘土で構成されている。1層は天井部が崩落した層である。

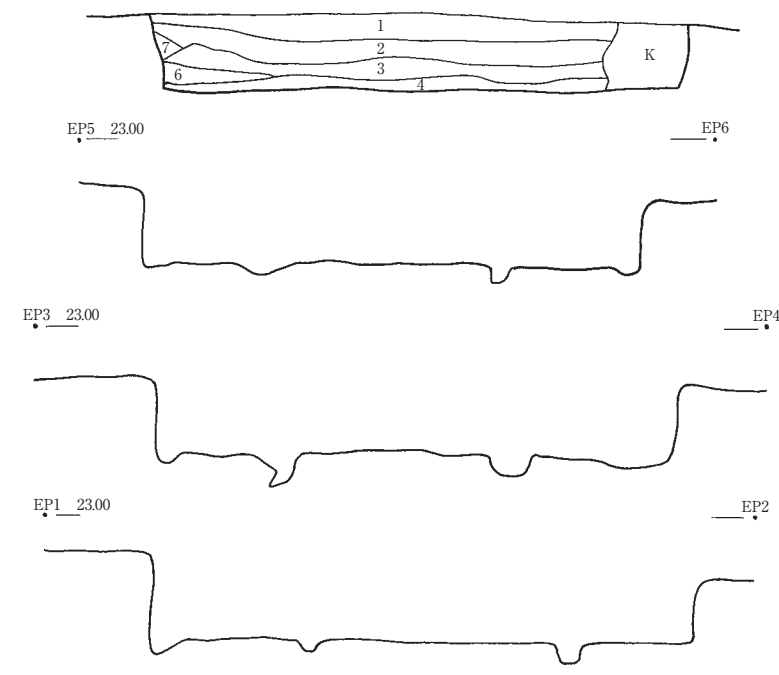
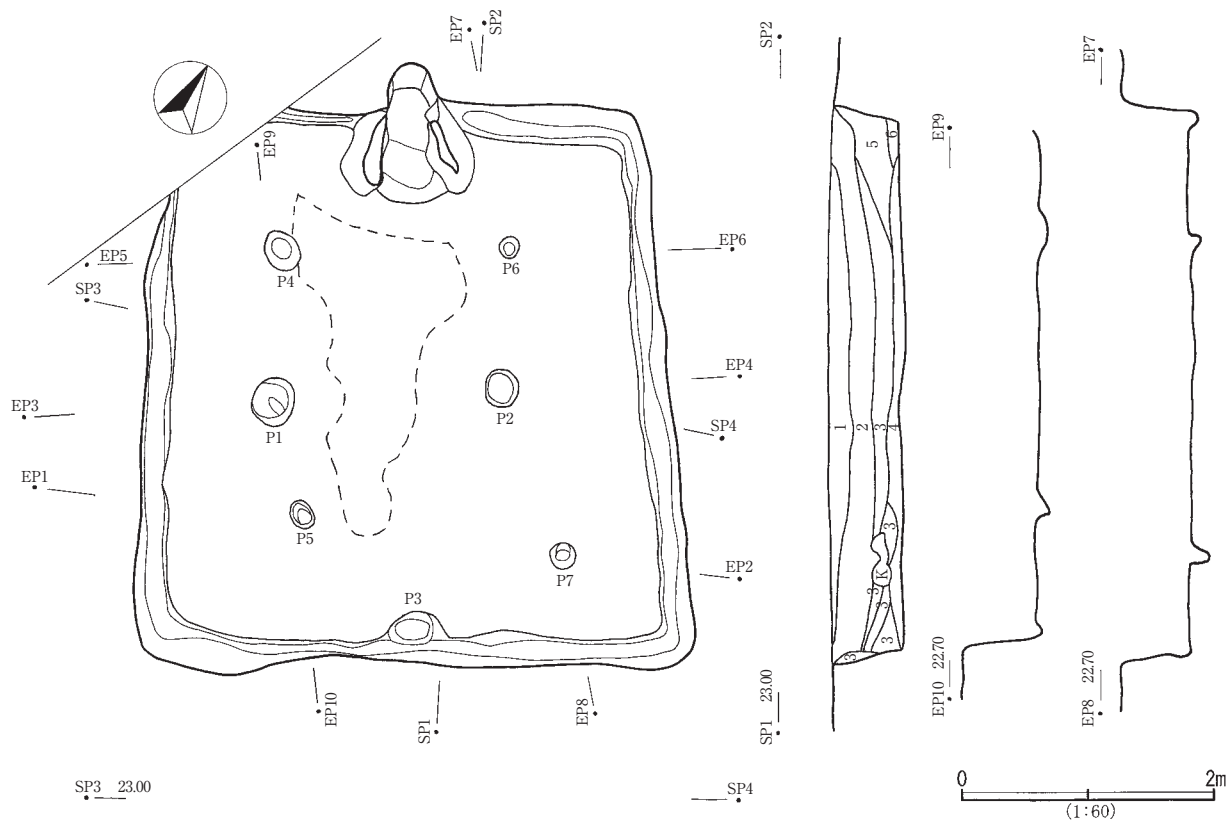
覆 土 基本7層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。4、7層は人為的な埋め戻しと考えられ、住居廃材等を燃やした為、焼土・炭化材が形成された。柱穴から、焼土・炭化物も検出され、柱を抜き取り後の焼却が想定できる。カマド脇に明瞭な焼土が認められた。その後に堆積した1、2、3層は、自然堆積である。

遺 物 住居全体の覆土上層から下層にかけて、少破片が少量出土した。出土遺物は、土師器、坏・甕・甌・支脚・鉄滓・土製品・石製品により構成される。2の坏は、住居中央やや南より床面から、口縁を下にした状況で出土した。3は、カマド袖上部の焼土内から出土した小型甕である。カマドに付属する棚などの施設から、廃絶後に転がり落ちたかのような状況が想定できる。5は、有段口縁坏である。6は、カマド手前、床から出土した支脚である。7は、カマド脇から出土した椀形鍛冶滓である。床面から出土したが明確な鍛冶炉はなく、カマドを利用したの簡単な作業の結果なのであろうか。扁平な滑石である11は、紡錘車の未製品である可能性がある。7の椀形鍛冶滓、8の土玉、10の石製紡錘車、11の石製品は何らかの手工業的な作業を連想させるが、垂直分布は上層から床面まで見られ、本住居の性格の決めてとはならない。隣接する県センターの調査範囲において、古墳時代中期の石製模造品工房跡が、4軒検出され未製品が多数出土している。9の滑石製有孔円板は、住居一括の出土で覆土に流れこんだ遺物であり、県センターの調査結果と関連する遺物であろう。

所 見 出土遺物から古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。

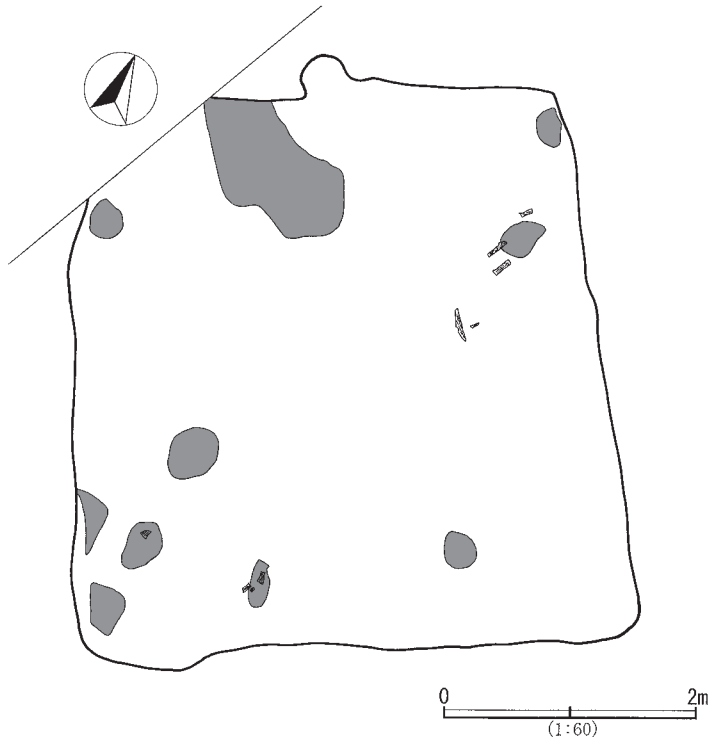
表3 3号住居跡 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	土師器 坏	口径 12.5 器高 6.4 底径 5.8	完形	暗赤褐色	白色砂粒少量	普	口縁やや歪みがある楕円形 外面 口縁ナデ 体部横位ヘラケズリ 内面 横位・縦位ヘラミガキ	内外面赤彩か
2	土師器 坏	口径 10.8 器高 6.5 底径 5.0	略完形	暗褐色	砂粒少量	普	外面 口縁ナデ 体部横位・斜位ヘラケズリ 内面 横位・縦位ヘラミガキ	
3	土師器 小型甕	口径 15.3 器高 16.0 底径 7.2	2/3	暗褐色	白色砂粒少量	普	最大径胴部上半 口縁直立気味 外面 口縁～頸部ナデ 胴部斜位ヘラケズリ→斜位ヘラミガキ 内面 口縁～頸部ナデ 胴部縦位ヘラミガキ	
4	土師器 甌	口径 (8.8) 器高 - 底径 (3.2)	口縁～ 胴部片	橙褐色	砂粒少量	普	外面 口縁ナデ 胴部斜位ヘラケズリ→縦位ヘラミガキ 内面 ナデ 胴部下端ヘラミガキ	
5	土師器 坏	口径 - 器高 (5.0) 底径 -	口縁片	褐色	緻密	普	口縁外反気味にほぼ直立 体部に稜 外面 口縁ナデ 底部横位ヘラケズリ 内面 ナデ	



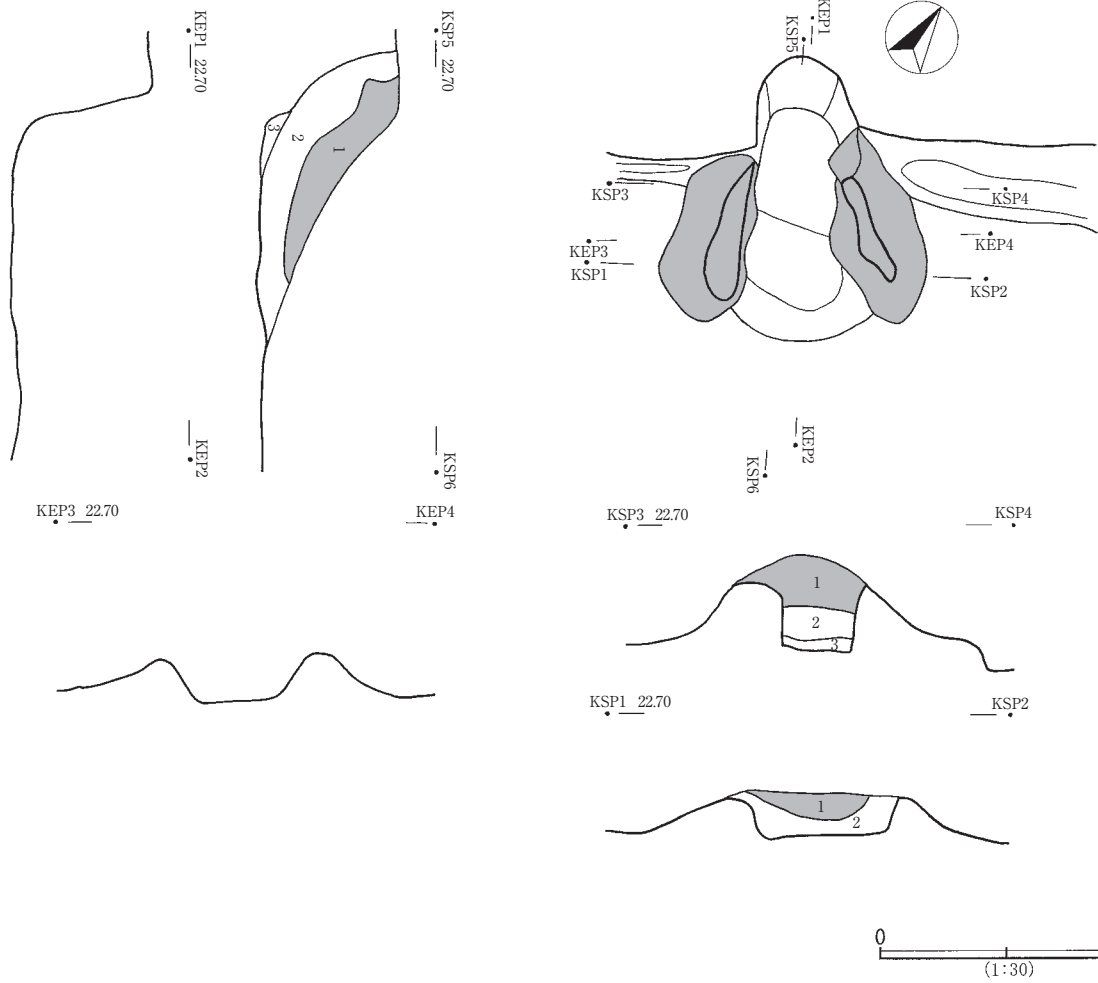
- 3号住居跡
- 1層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量の黒色土が滲む様に混ざった層。粘性弱い。締まり普通。
  - 2層 黒褐色土層 黒色土を主体とした層で、少量の黒色土とごく少量のロームが、滲む様に混ざった層。粘性弱い。締まり普通。
  - 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量の黒色土と少量のロームが滲む様に混ざった層。粘性弱い。締まり普通。
  - 4層 暗黄褐色土層 暗褐色土の中に多量のロームブロックが、ごちゃごちゃに混ざった層。少量の炭化物。焼土粒子を含む。粘性弱い。締まり普通。
  - 5層 暗黄褐色土層 暗褐色土とロームが均一に混ざった層。SP2側にみられる土層である。粘性弱い。締まり普通。
  - 6層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量のロームと少量の黒色土が滲む様に混ざった層。粘性弱い。しまり普通。
  - 7層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量の黒色土と少量のロームが、ごちゃごちゃに混ざった層。焼土炭化物を少量含む。粘性弱い。締まり普通。
  - 8層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体とした層。壁崩壊層である。粘性弱い。締まり普通。
  - 9層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体とした層。壁崩壊層である。粘性弱い。締まり普通。

第8図 3号住居跡



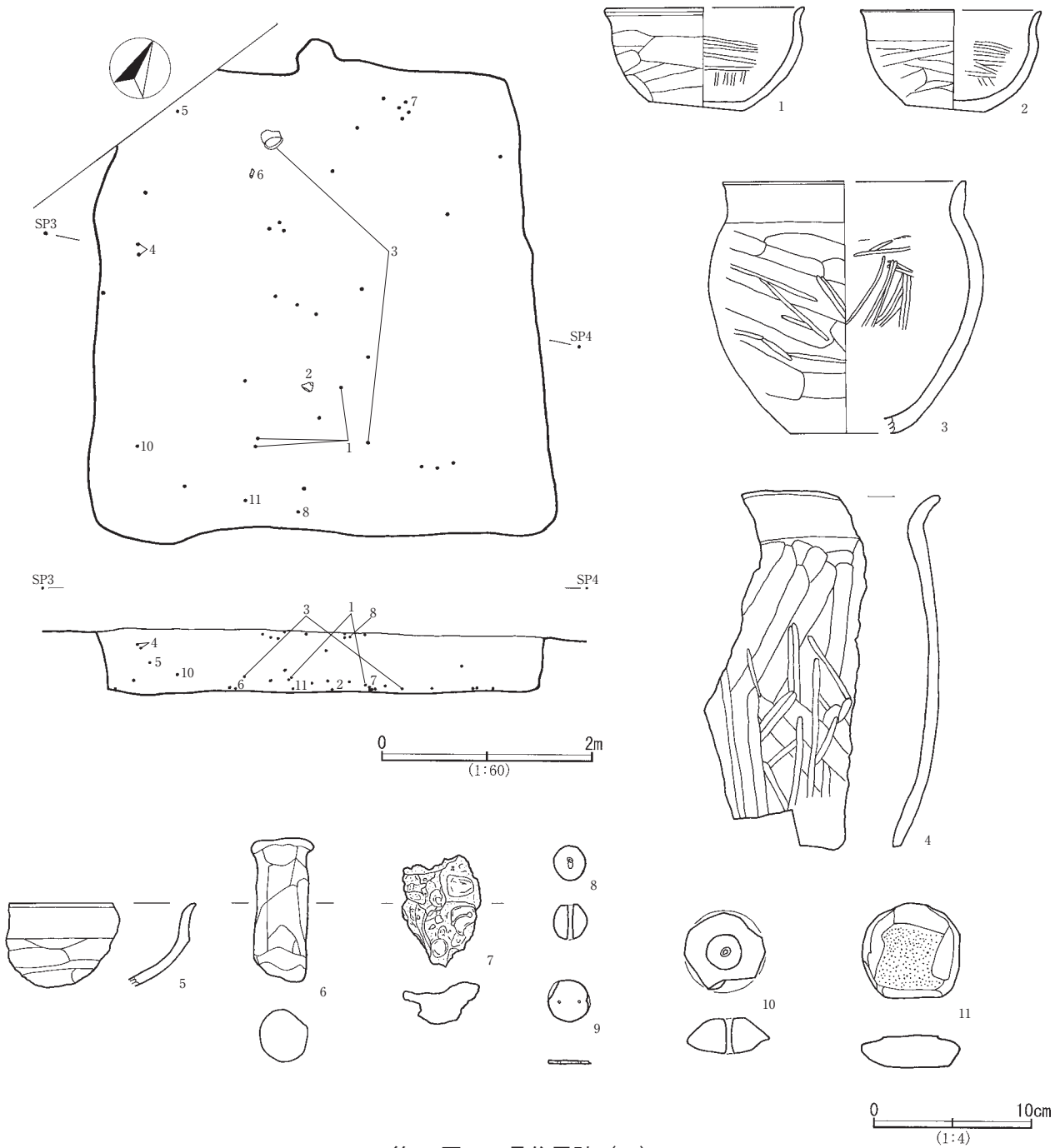
3号住居跡 カマド

- 1層 灰褐色土層 白色粘土を主体とし、少量の暗褐色土がごちゃごちゃぎみに混ざった層。天井部の崩落層である。粘性弱い。縮まり弱い。
- 2層 暗褐色土層 暗褐色土が熱を受け、赤色焼土化し、焼土と暗褐色土がごちゃごちゃに混ざった層。ごく少量のロームを含む。粘性弱い。縮まり弱い。
- 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、ごく少量のロームと白色粘土が、滲む様に混ざる。カマド崩壊前に流れ込んだ土と思われる。粘性非常に弱い。縮まり非常に弱い。



第9図 3号住居跡 (2)





第10図 3号住居跡(3)

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	重さ	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
6	土製品 支脚	全長 (8.8) 最大幅 3.8	略完形	暗褐色	緻密	普	重さ 110g	
7	碗型 鍛治滓	口径 7.1 器高 2.7 底径 5.1	底部片	茶褐色	-	-	厚めの碗型鍛治滓 上面側に砂付着 破断面は黒灰色 上面は緩やかな流動状を呈し赤錆が広範囲 底部に木炭付着	
8	土製品 土玉	長さ 2.2 幅 2.1 孔径 0.4	-	9.7g	-	-	孔は斜めに穿たれる	
9	石製品 有孔円盤	径 2.2 厚さ 0.2 孔径 0.1	略完形	3.5g	-	-	滑石製 模造品	
10	石製品 紡錘車	上部径 2.0 下部径 0.2 厚さ 2.2 孔径 0.4	4/5	68g	-	-	蛇紋岩か 珠算玉形 軸孔は上下から穿たれているため中心部は狭い 軸孔内面 横方向の擦痕	
11	石製品	長径 6.0 短径 5.6 厚さ 2.1	完形	157g	-	-	滑石 平面に擦痕 周囲が細かく砕かれ磨耗	紡錘車を作る過程の未製品か

### 3. 4号住居跡（第11図、12図）

検出地区 J-4G、K-4Gに位置し、調査区東側に所在し、全体の1/3が検出された。

遺 構 長軸4.6m×短軸3.0m。深さ0.4m。方形の竪穴住居跡が推定できる。床はソフトロームをよく踏み固めた床で平坦である。住居跡中央部に硬化面が広がる。壁もロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

付属施設 柱穴はP1・P2である。柱穴の直径は0.4~0.5m、深さは0.25~0.4mを測る。柱穴は、それほど深くない。柱穴の間隔は、長軸方向およそ2mである。周溝は、全周し、幅0.2m、深さ約0.1mのしっかりとした溝であった。

カマド 住居跡北壁ほぼ中央に位置し、両袖とも残り、遺存状況は良好である。火床部から煙道部まで1.2m、袖部長さ0.5mである。火床部から燃焼部は、平坦な面を作るが、煙道部は角度をもって立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。砂質粘土で構成されている。1層は天井部が崩落した層である。

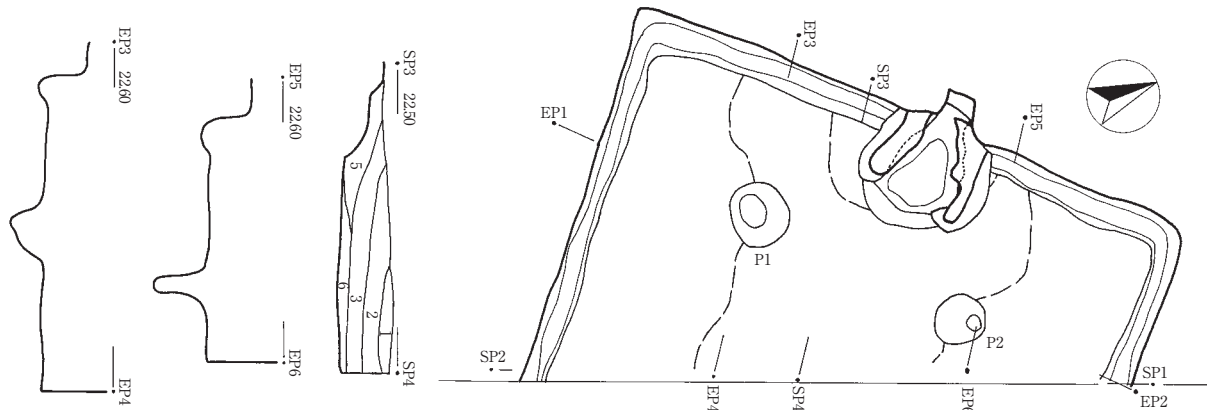
覆 土 基本7層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。4、5、6、7、8層は人為的な埋め戻しと考えられ、住居廃材等を燃やした為、焼土が形成された。カマド脇にうっすらとひろがる焼土も確認できた。貝層が住居北西角において、上層から床面にかけておよそ1mの範囲で分布していた。出土した貝の総重量は、約17kgであり、貝層は2層に分かれ、その間に暗褐色土と焼土が堆積する。第1貝層・第2貝層ともにハマグリがほとんどを占め、第2貝層が、第1貝層より広い。第2貝層は、純貝層に近い堆積土であり、ハマグリ以外にもシオフキ・チョウセンハマグリなどがみられる。出土した貝層は、覆土の堆積中にまとめて投棄したかのような状況であった。2、3層は、自然堆積の埋没過程がみてとれる。

遺 物 カマド脇、北西壁際から少破片が集中して、住居中央にむかって流れ込む状態で出土した。出土遺物は、土師器、坏・甕・甑により構成される。1・2は、有段口縁坏である。2は、赤彩された坏で、第2貝層中から出土した。床に近い高さおよび床面からは、図示できる遺物として、5・6の甕底部、7の甑が出土した。5は、胴部最大径が口縁とほぼ同じかやや大きくなるものと想定でき、6は、口縁より胴部最大径が大きくなる、甕の底部から胴部たちあがり部分なのである。遺物出土状況から住居廃絶時に、損壊した土器を遺棄した状況が見てとれる。

所 見 出土遺物から古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。

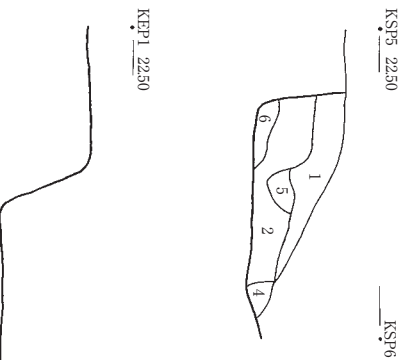
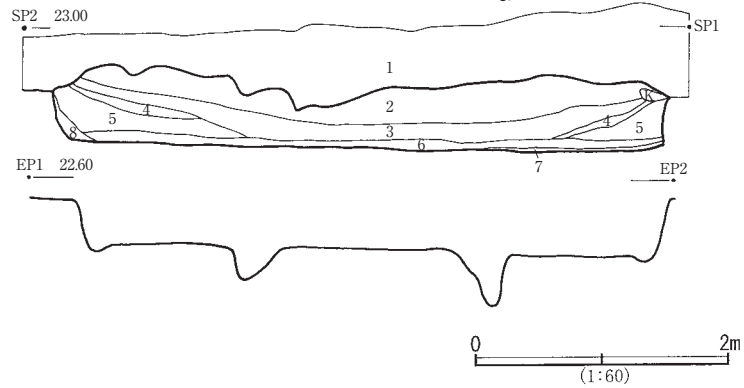
表4 4号住居跡 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	土師器 坏	口径 (11.0) 器高 5.1 底径 -	1/4	橙褐色	砂粒少量 赤色スコリア微量	良	外面 口縁ナデ 体部斜位ヘラケズリ 内面 口縁ナデ 体部斜位ヘラミガキ	
2	土師器 坏	口径 12.0 器高 (3.7) 底径 -	口縁~ 底部片	橙褐色	黒色砂粒多量	良	外面 口縁~頸部ナデ 体部多方向ヘラケズリ 内面 面取りのような段 明瞭な横ナデ	赤彩の痕跡が口縁に明瞭 内面全体・外面体部上半も赤彩らしき痕跡
3	土師器 甕	口径 - 器高 1.8 底径 (7.0)	底部片	褐色	砂粒少量 赤色スコリア微量	良	外面 底部多方向ヘラケズリ 内面 ナデ	
4	土師器 甕	口径 - 器高 (5.7) 底径 (6.0)	底部片	外面 橙褐色 内面 黒色	砂粒多量	良	外面 胴部横位ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 胴部下端ナデ	
5	土師器 甕	口径 - 器高 11.0 底径 5.0	胴部~ 底部片	外面 黒色 内面 橙褐色	長石微量	良	外面 胴部斜位・横位ヘラケズリ 底部多方向ヘラケズリ 内面 胴部横位ヘラナデ	
6	土師器 甕	口径 - 器高 (6.2) 底径 (7.6)	底部片	黒褐色	赤色スコリア微量	良	外面 胴部下半ヘラケズリ→ヘラミガキ 底部多方向ヘラケズリ 内面 胴部下半ナデ	
7	土師器 甑	口径 - 器高 (8.5) 底径 (9.0)	1/4 胴部~ 底部片	黒褐色	砂粒多量 赤色スコリア微量	良	外面 胴部縦位・横位ヘラケズリ 内面 胴部ナデ	



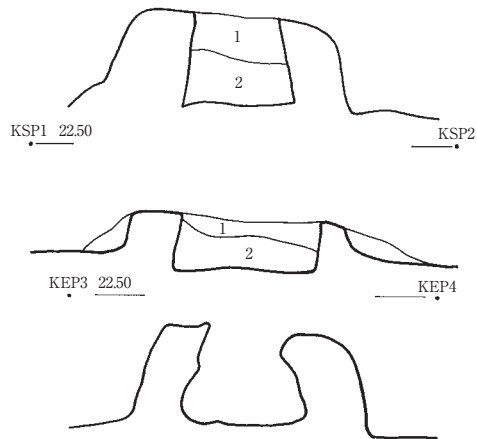
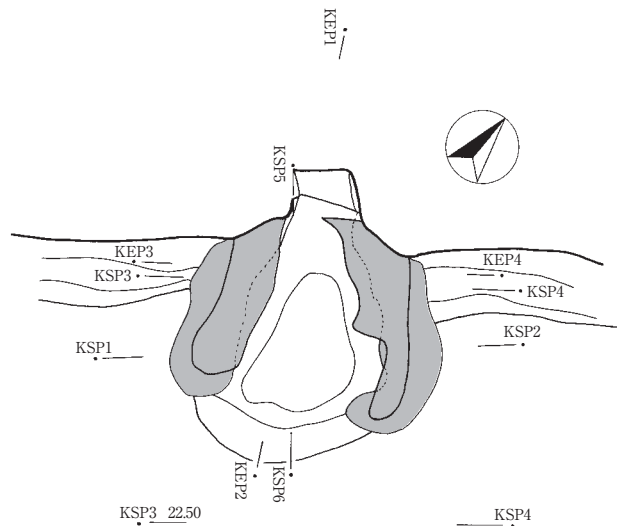
4号住居跡

- 1層 暗褐色土層 表土層 暗褐色土層、黒色土がごちゃごちゃに混ざっている。下層に大量の焼土を含む。粘性弱い。締まり強い。
  - 2層 黒褐色土層 黒色土を主体としながらも、多量の暗褐色土が滲む様に混ざる少量のロームを含む。粘性弱い。締まり強い。
  - 3層 黒褐色土層 黒色土を主体とした層で、少量の暗褐色土が滲む様に混ざる層。少量のロームを含む。粘性弱い。締まり強い。
  - 4層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量の黒色土、大量のロームがごちゃごちゃに混ざった層。粘性弱い。締まり強い。
  - 5層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量のローム、少量の黒色土が滲む様に混ざる層。少量の焼土を含む。粘性弱い。締まり普通。
  - 6層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体としながらも、多量の暗褐色土、少量の黒色土が滲む様に混ざる層。少量の焼土を含む。粘性弱い。締まり普通。
  - 7層 暗黄褐色土層 汚れたロームを主体とした層で、少量の黒色土が滲む様に混ざった層。粘性弱い。締まり普通。
  - 8層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量の黒色土が滲んだ層。少量の炭化物を含む。粘性弱い。締まり弱い。
- (8, 7, 6, 5, 4層が人為的推積で、3, 2層が自然推積、1層が表度層である)

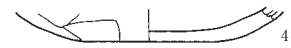
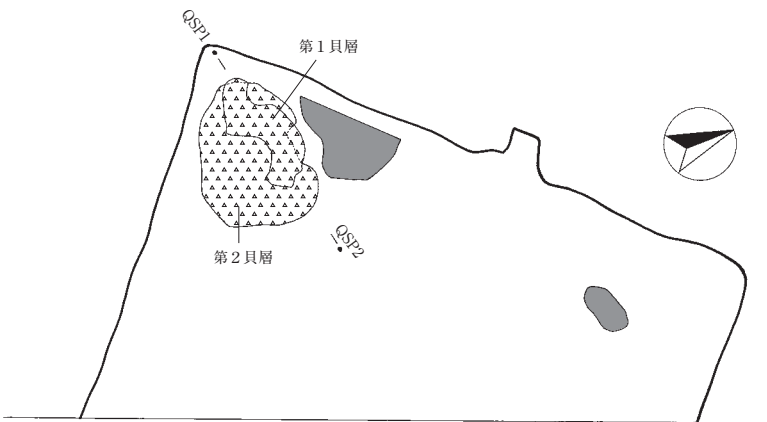
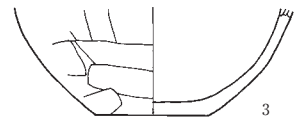
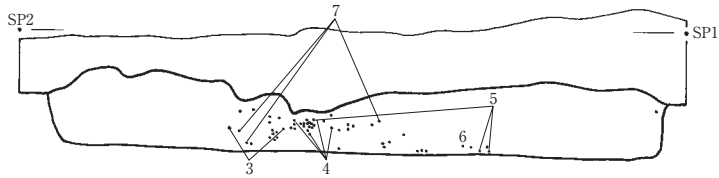
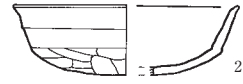
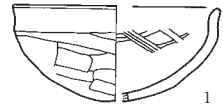


4号住居跡 カマド

- 1層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量の白色粘土が滲む様に混ざる土。天井部が崩れ流れたもの。粘性弱い。締まり弱い。
- 2層 暗赤褐色土層 暗褐色土を主体に、大量の焼土が滲む層。中1cm程度のローム粒、焼土粒を多量に含む。粘性弱い。締まり弱い。
- 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に、少量の黒色土と少量のロームが滲む様に混ざる土。粘性弱い。締まり弱い。
- 4層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に、少量の黒色土と少量の焼土が滲む様に混ざる土。粘性弱い。締まり弱い。
- 5層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量の焼土がごちゃごちゃに混ざった層。粘性弱い。締まり弱い。
- 6層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした層で、少量の焼土と粘土が滲む様に混ざった層。カマド崩壊前に流れ込んだと考えられる。粘性弱い。締まり強い。

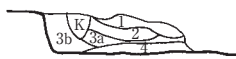
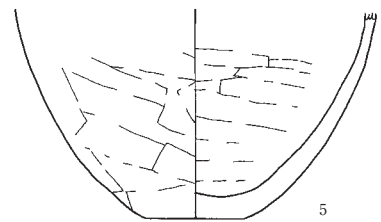


第11図 4号住居跡



QSP1 22.90

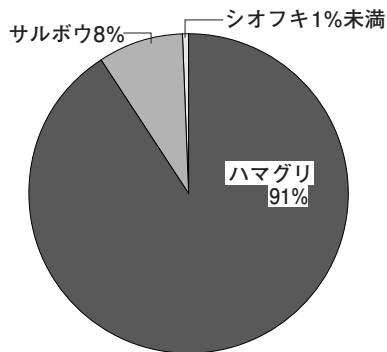
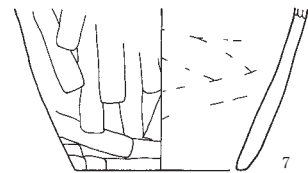
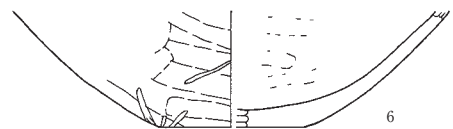
QSP2



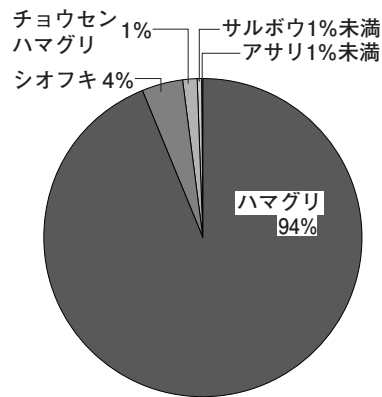
0 2m (1:60)

貝層セクション

- 1層 黒褐色土層 混土貝層。黒色土に少量の暗褐色土がごちゃごちゃに混ざった層で、多量の貝が混ざる。第1貝層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 2層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、極少量の黒色土がにじむように混ざる層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 3a層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、少量の黒色土と少量の焼土がにじむように混ざる層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 3b層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、少量の黒色土がにじむように混ざり、少量の焼土がにじむように混ざる層。粘性非常に弱い。縮まり弱い。
- 4層 暗褐色土層 混土貝層。暗褐色土を主体として、少量のローム、少量の黒色土がにじむように混ざる層。第2貝層。第1貝層より広く拡がり、堆積状態も純貝層に近い。粘性非常に弱い。縮まり弱い。



第1貝層 総重量1624g



第2貝層 総重量15740g

0 10cm (1:4)

第12図 4号住居跡(2)

## 第2節 奈良・平安時代

### 4. 1号住居跡（第13図、14図、15図）

検出地区 B-2Gに位置し、調査区南側に所在し、単独で検出された遺構である。

遺 構 長軸3.6m×短軸3.7m。深さ0.10～0.20mのやや不整な方形の竪穴住居跡である。床全体は、軟弱なソフトロームで、カマド前から反対の壁にかけて部分的に踏み固めた暗褐色土の硬化面が広がる。壁は暗褐色土の壁で緩い角度で立ち上がる。遺構の一部に攪乱が存在した。

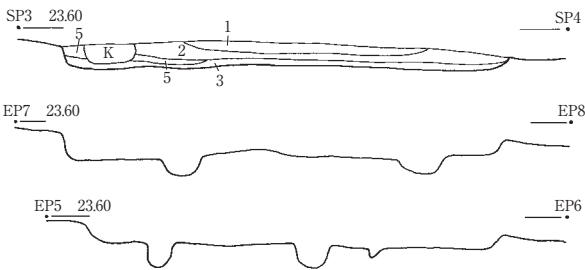
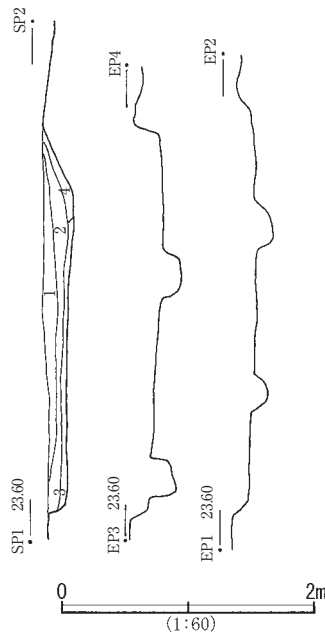
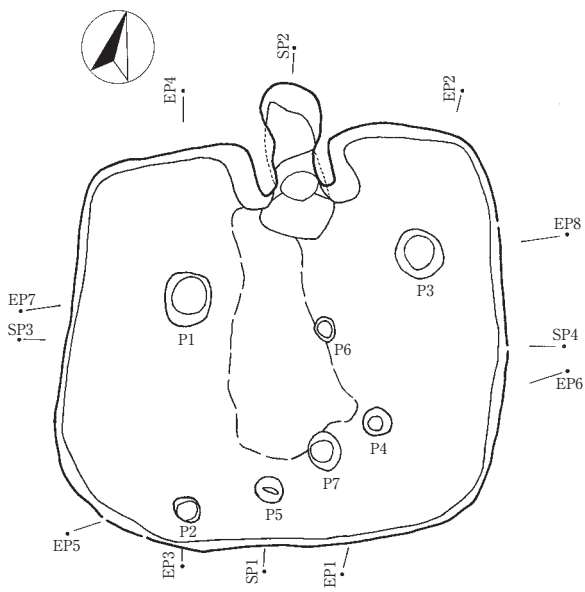
付属施設 柱穴はP1～P4で、P5・P6・P7は補助的な柱穴であろう。柱穴の直径は0.2～0.4m、深さは0.15mを測る。柱穴の間隔は、P1・P2・P3でほぼ1.8mの等間隔である。周溝は検出されなかった。

カマド 住居跡北壁ほぼ中央に位置し、両袖とも残り、遺存状況は良好である。火床部から煙道部まで1.3m、袖部長さ0.5～0.6mである。火床部から煙道部は緩い角度をもって立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。砂質粘土で構成されている。2層は天井部が崩落した層である。

覆 土 基本は5層に分層される。住居跡の遺存状況が悪かったため、本来の住居では、覆土下層にあたる。自然堆積の土層が観察できた。

遺 物 住居全体の覆土上層から下層にかけて、少破片が散漫に出土した。出土遺物は、須恵器・土師器、坏・甕・甑・蓋・長頸壺・托・鉄鉢形土器により構成される。長頸壺肩部小破片である5は、床面出土であるが、接合する破片は他にみられなかった。6の土師器坏、18の土師器甕は、カマドに伴い出土した。カマド天井部の粘土の上において、口縁部を下にして6の土師器坏は出土した。坏体部には、「吉祥」の文字が正位で書かれている。18の土師器甕は、カマド掛口に、胴部下半を据え置いた状態で検出した。18の下には甕土器片が重ねられており、支脚の用途で用いられたと思われる。18の他に、カマド覆土内には、17の土師器甕胴部片がちらばっていた。7・8・9・10の土師器坏は、ロクロ成形で墨書がしるされている。8の坏は、覆土下層から口縁を上にし、斜めの状態で出土した。体部外面の正位に記号らしき墨書が書かれている。底部内面には、ヘラでクローバー状の記号が線刻されている。住居一括遺物として出土した9は、口縁部内面にすす状のものが付着しており、体部外面には墨書もしるされている。14の土師器蓋破片は、内面黒色処理。19の土師器托は、住居中央ややカマドよりで覆土上層の位置から出土した。托の特徴は、口径11.0cmを測り、ロクロ成形であり、体部下半に強いヘラケズリが施される。高台部はあとから貼り付け、断面は三角形であり、しっかりと外にひらく。口縁は二重での受け部口縁を貼り付け、外側口縁は外反し花卉を模している。市内では他に3遺跡で出土している。井戸向遺跡出土の托は、三彩陶器であり、19の托と比べると、共通点は認められずひとまわり小さい。向境遺跡出土の托は、緻密な胎土の須恵器で、装飾性が見られない一重の口縁である。川崎山遺跡の土師器托は、権現後の托と酷似している。20の土師器鉄鉢形土器は住居北西カマドに近い覆土下層の地点から、底部を下にした状態で出土した。ロクロ成形で内外面密なヘラミガキが施され、口唇は角張る稜を有し、肩部が外に張り出し丸底の形状を呈する。内面には、黒色処理が施され、外面にも部分的に広がる。

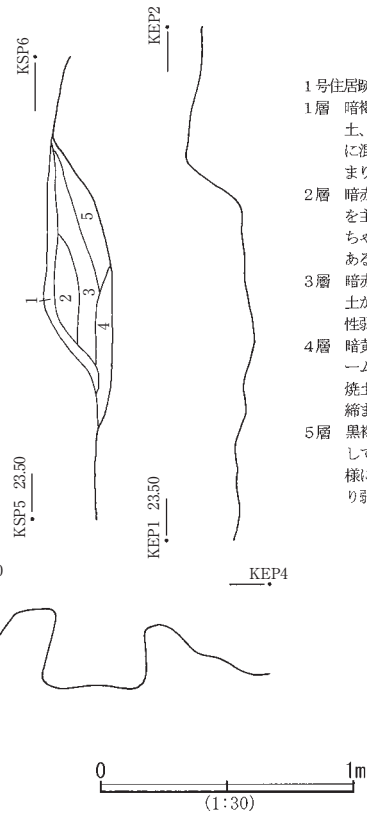
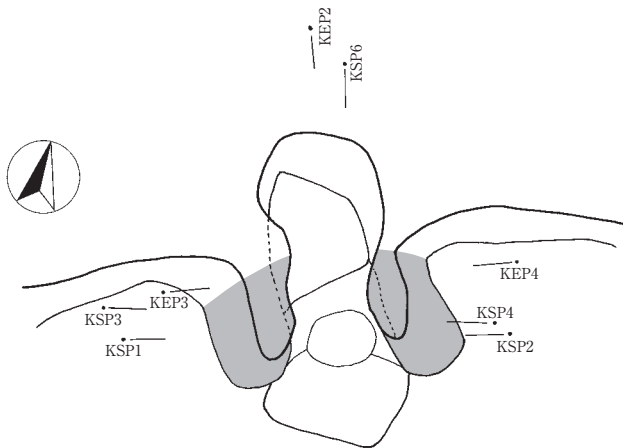
所 見 出土した遺物から、8世紀代後半の竪穴住居跡と判断できる。



1号住居跡

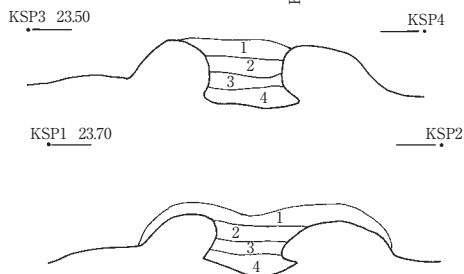
- 1層 黒褐色土層 黒色土を主体とし、少量の暗褐色土が全体に滲む様に混ざった層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 2層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、ごく少量の暗褐色土とごく少量のロームが滲む様に混ざった層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体としながらも、多量のロームが滲むように混ざった層。床直層である。粘性弱い。縮まり弱い。
- 4層 黒褐色土層 黒色土を主体とし、少量の暗褐色土が滲む様に混ざる層。少量の炭化物を含む。カマド崩壊に伴うセクション。粘性弱い。縮まり弱い。
- 5層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、少量のロームとごく少量の黒色土が滲む様に混ざった層。住居、北西側のみに見られるセクション。粘性弱い。縮まり弱い。

(住居跡の遺存状況が悪かった為、本セクションは本来の住居 フク土の下層のみと思われる。自然堆積のセクションである。)

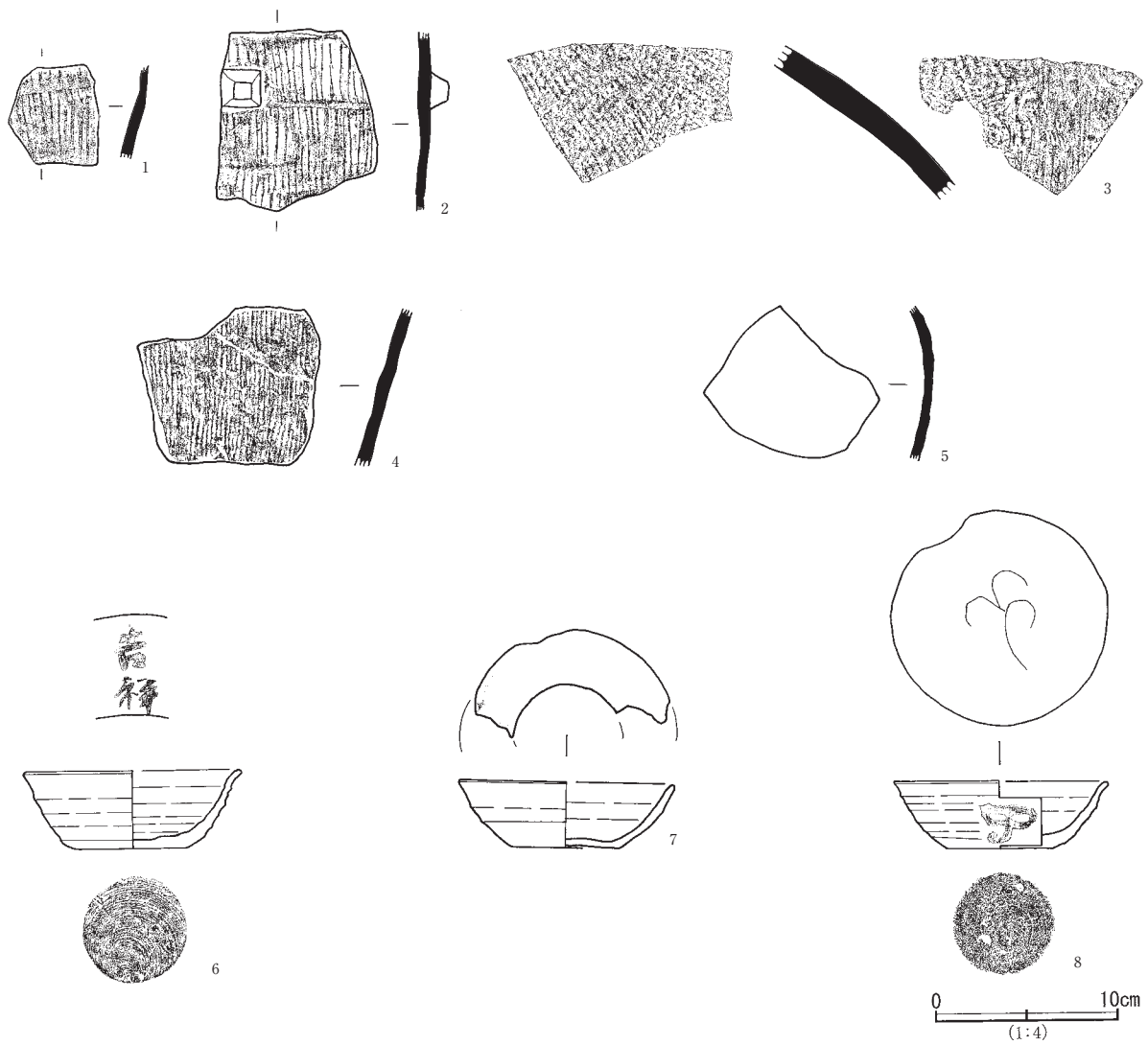
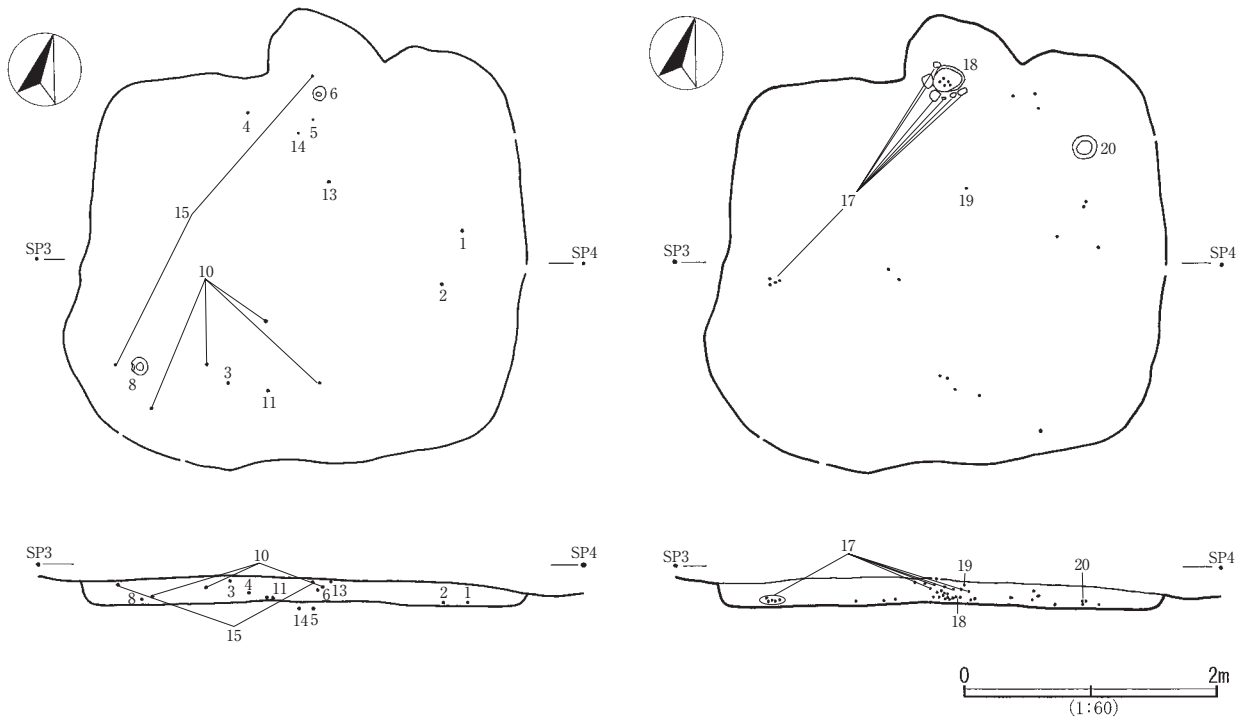


1号住居跡 カマド

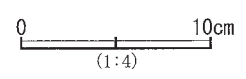
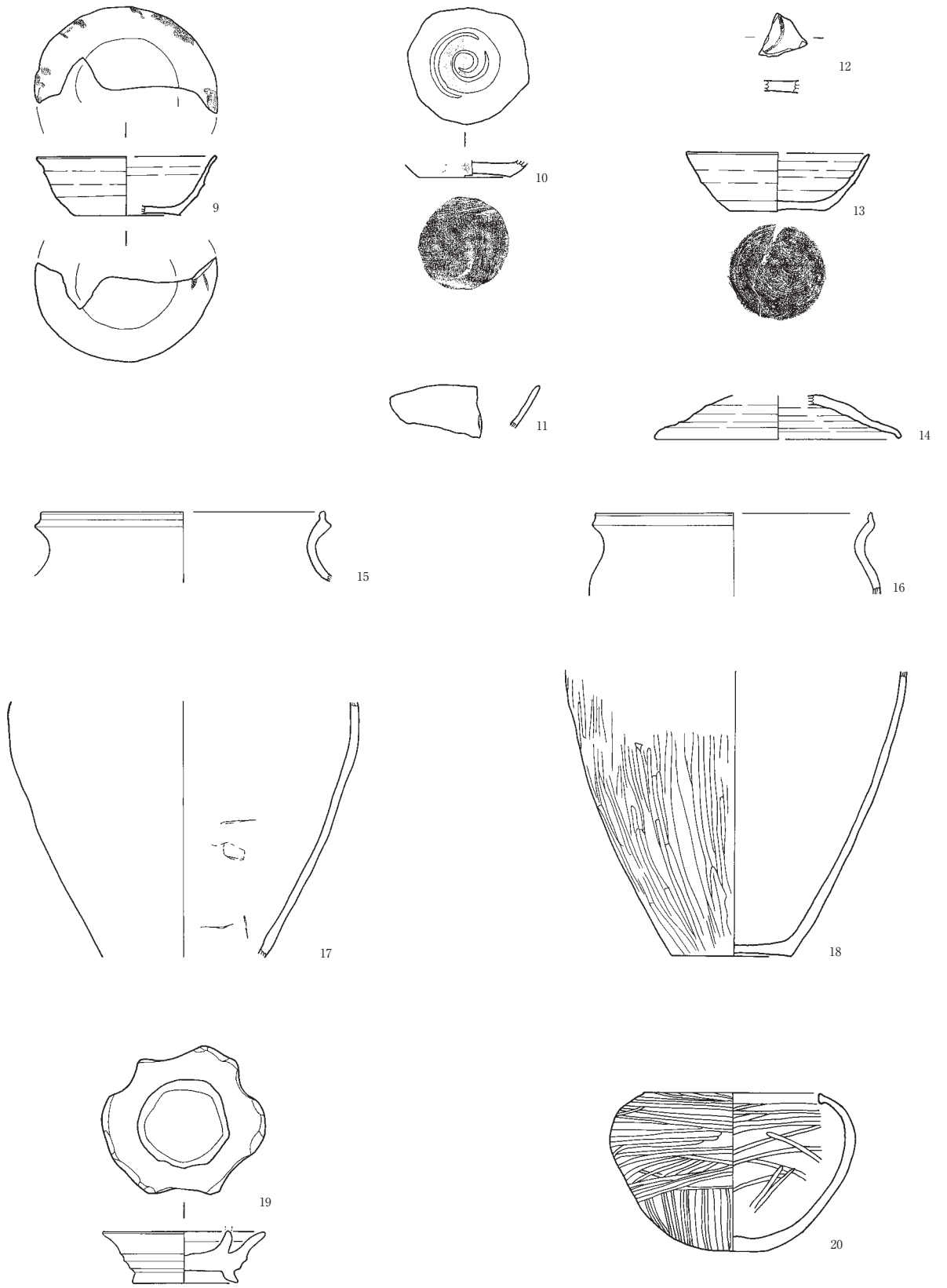
- 1層 暗褐色土層 暗褐色土、黒色土、白色粘土がごちゃごちゃに混ざった層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 2層 暗赤褐色土層 赤化した粘土を主体に暗褐色土がごちゃごちゃに混ざった層。天井部である。粘性弱い。縮まり弱い。
- 3層 暗赤褐色土層 暗褐色土と焼土が、均一に混ざった層。粘性弱い。縮まり弱い。
- 4層 暗黄褐色土層 暗褐色土とロームが、均一に混ざった層で、焼土が少量滲む。粘性弱い。縮まり弱い。
- 5層 黒褐色土層 黒色土を主体として、少量の暗褐色土が滲む様に混ざる。粘性弱い。縮まり弱い。



第13図 1号住居跡



第14图 1号住居跡 (2)



第15图 1号住居跡 (3)



表5 1号住居跡 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	須恵器 甌	口径 - 器高 (5.9) 底径 -	微細片	暗褐色	長石少量	良	外面 タタキ目 内面 ナデ	No.2と同一個体の可能性。
2	須恵器 甌	口径 - 器高 (9.9) 底径 -	微細片	黒色	長石多量	良	外面 タタキ目 内面 ナデ	No.1と同一個体の可能性。 内面磨耗箇所あり。転用硯。
3	須恵器 大甕	口径 - 器高 (8.5) 底径 -	胴部片	青灰色	砂粒少量	良	外面 格子状タタキ目 内面 胴部上半横ナデ 下半当具痕	
4	須恵器 甕	口径 - 器高 (8.8) 底径 -	胴部片	灰色	石英多量 砂粒多量	良	外面 胴部下端タタキ目 内面 ナデ	
5	須恵器 長頸壺	口径 - 器高 (8.3) 底径 -	肩部片	外面 黄灰色 内面 青灰色	黒色砂粒	堅緻	ロクロ成形 外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	東海産
6	土師器 坏	口径 15.0 器高 4.4 底径 5.9	完形	褐色	緻密	普	ロクロ成形 外面 体部ナデ 下端ヘラケズリ 底部回転糸切り 内面 ナデ	墨書「吉祥」 体部外面正位
7	土師器 坏	口径 (12.0) 器高 3.5 底径 (6.0)	1/8	橙褐色	金雲母多量 長石多量 赤色スコリア微量	普	ロクロ成形 外面 体部上半～下半横ナデ 下端横位回転ヘラケズリ 底部切り離し不明→回転ヘラケズリ 内面 横ナデ	墨書「亡」
8	土師器 坏	口径 11.8 器高 3.7 底径 5.8	略完形	淡橙褐色	赤色スコリア少量	普	ロクロ成形 外面 体部ナデ 下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り 内面 ナデ	口縁部一部欠損。ススらしきもの付着。 墨書「ア」 ヘラ書「ヤ」
9	土師器 坏	口径 12.2 器高 4.0 底径 7.0	1/2	外面 橙褐色 内面 暗橙褐色	長石多量 金雲母多量 赤色スコリア微量	普	ロクロ成形 外面 体部上半ナデ 下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り 内面 ナデ	内面口縁部に タール状のスス 付着 墨書「く」
10	土師器 坏	口径 - 器高 1.1 底径 6.2	底部片	橙褐色	金雲母多量 赤色スコリア微量	普	外面 体部下端横位ヘラケズリ 底部回転糸切り→他方向ヘラケズリ 内面 ナデ	内面 薄い渦巻き墨書
11	土師器 坏	口径 - 器高 (2.9) 底径 -	口縁 微細片	明橙褐色	金雲母多量 長石少量	普	ロクロ成形	墨書「く」 部分的なもの
12	土師器 坏	口径 - 器高 - 底径 -	底部 微細片	橙褐色	金雲母多量	普	ロクロ成形 外面 回転糸切り→周辺回転ヘラケズリ 内面 ナデ	墨書「ノ」 部分的なもの 明確な墨の濃さ
13	土師器 坏	口径 12.4 器高 3.9 底径 6.5	2/3	橙褐色	金雲母多量 長石少量	普	ロクロ成形 外面 体部上半～下半横ナデ 底部回転糸切り→周縁回転ヘラケズリ 内面 ナデ	内面スス付着
14	土師器 蓋	口径 (16.6) 器高 (3.0) 底径 -	口縁 微細片	外面 橙褐色 内面 黒色	砂粒混入 長石多量	普	ロクロ成形 外面 天井部ヘラケズリ ナデ 内面 密なヘラミガキ	内面黒色処理
15	土師器 甕	口径 (19.0) 器高 (4.7) 底径 -	1/3 口縁 ～頸部片	橙褐色	石英多量 長石少量	良	外面 ナデ 内面 ナデ	常総型甕
16	土師器 甕	口径 (19.1) 器高 (5.6) 底径 -	1/4 口縁 ～頸部片	暗橙褐色	長石少量 金雲母微量	普	外面 ナデ 内面 口縁ナデ	常総型甕
17	土師器 甕	口径 - 器高 (12.2) 底径 -	1/4 胴部片	暗褐色	長石石英多含 金雲母微含	普	外面 縦位ナデ 器面に顕著ではない 内面 輪積み痕顕著 横ナデ 一部ヘラナデ	
18	土師器 甕	口径 - 器高 (19.2) 底径 8.0	胴部～ 底部	暗褐色	砂粒を少量含む 石英微量含む	普	ロクロ成形 外面 縦位密なヘラケズリ 内面 ナデ	口縁部と接合し なかったが、常 総甕と考えられ る。
19	土師器 托	口径 11.0 器高 3.5 底径 7.1	略完形	橙褐色	金雲母長石混入	普	ロクロ成形 外面 口縁横ナデ 胴部下半横位ヘラケズリ 底部回転糸切り→周縁ナデ→高台部後づけ 内面 横ナデ 受け部後づけ	仏具
20	土師器 鉄鉢形土器	口径 11.8 器高 10.7 底径 2.5	完形	外面 褐色～ 黒褐色 内面 黒褐色	緻密	良	ロクロ成形 外面 横位ヘラケズリ→横位・斜位ヘラミガキ 内面 横位ヘラミガキ	仏具 内面・外面一部 黒色処理

### 第3節 近世

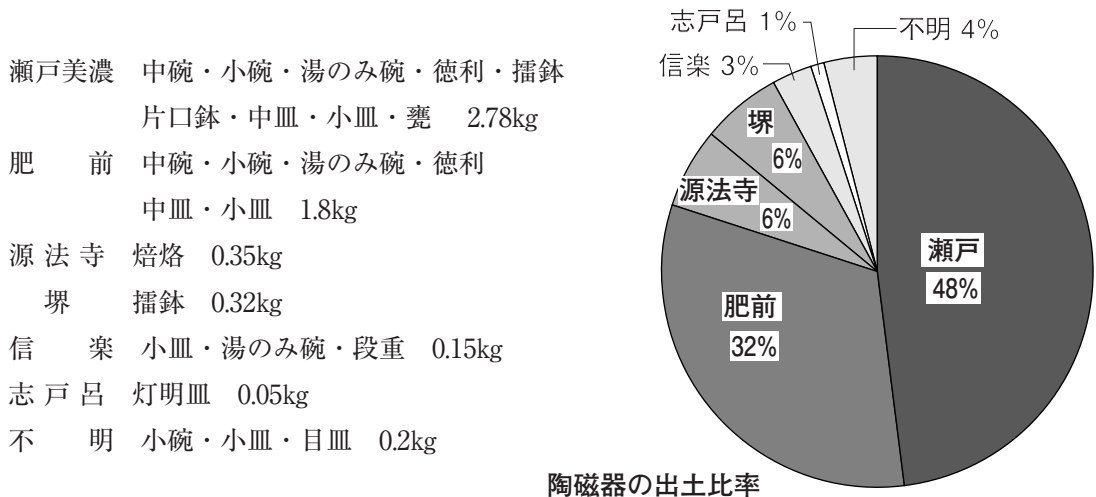
#### 5. 1号溝状遺構（第16図）

検出地区 B-3Gから、M-3Gまで調査区中央に1条、ほぼ南北方向に調査範囲外までのびる。現在の飯綱神社北参道口にむかう原道の南北方向と重なり、神社本殿と並行する。

遺構 C-3Gで1号土坑と重複する。土層の切り合いから、1号土坑が古く、溝状遺構が新しいことが観察できる。溝状遺構の規模は、全長56m以上、幅0.9~1.8m、深さ約0.5mを測る。掘り込みのしっかりした、角度をもつ逆台形に近い段面形状を呈し、底面は平坦な面であるが硬化面は認められなかった。またK-3G付近、溝北端に近い部分の覆土中層から、貝集中地点が検出され、およそ3mの範囲でひろがり、その中でも集中部分がみられた。貝は赤貝であり、総量0.9gを測り、遺構が機能せず埋没する途中で、貝をまとめて投げ込み遺棄したかのような出土状況であった。

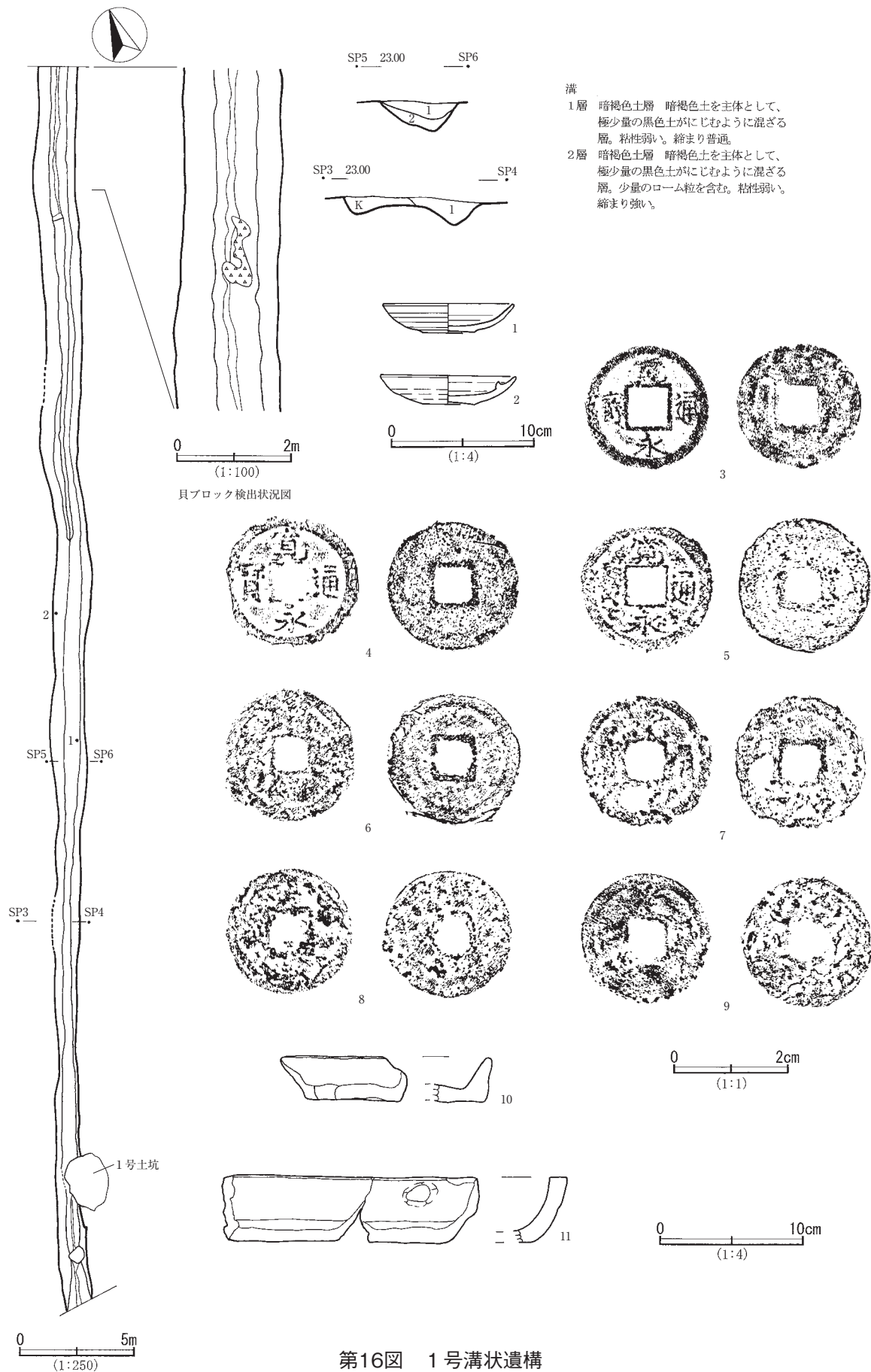
覆土 2層の暗褐色土にわかれ、1層より2層の土質がしまり、2層は埋戻しの可能性がある。

遺物 覆土上層から中層にかけて、テン箱で2箱分の縄文・土師器・須恵器・陶器・磁器・土師質土器・鉄器・銭貨・瓦が出土した。溝にともなって主体的に出土した遺物は、陶器・磁器・土師質土器、銭貨、総重量約5.7kgであり、産地として瀬戸美濃・肥前・源法寺・堺・信楽・志戸呂・産地不明に分類できる。以下、産地などを簡単に記載する。



遺物出土総重量の48%を瀬戸・美濃の陶磁器が占め、次いで32%の肥前磁器の割合が高い。源法寺（6%）・堺（6%）・信楽（3%）・志戸呂（1%）は、それぞれ1割にも満たない出土量であり、種別も限定される。溝出土の主体となる瀬戸・美濃は、17~19世紀までの時間幅がみられるが、なかでも中心となる時期は19世紀であった。1・2の内面に茶色の鉄釉がかかる瀬戸美濃の灯明皿は、19世紀に比定され、セットで使用されていたものである。図示した以外にも、灯明皿の組合せは出土している。3~5までの寛永通宝は、新寛永で使用年代は18世紀からである。10は底部に孔があく、目皿の可能性はある。11の源法寺焼は、茨城県真壁町（現桜川市）で焼かれていた土師質の焙烙である。源法寺焼は、口縁~底部まで3~5cmの非常に低い器高が特徴であり、胎土に金雲母を含み、橙褐色の色調が目立つ。時期は、17~18世紀に比定できる小破片で、内耳の痕跡が認められる。出土遺物は、覆土中層から上層にかけて、遺構埋没過程で遺棄されたのであろう。

所見 出土遺物は19世紀代であり、溝は19世紀以前に存在していた。



第16図 1号溝状遺構

表6 1号溝状遺構 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	陶器 灯明皿	口径 9.6 器高 2.0 底径 3.6	2/3	外面 茶褐色 ~灰褐色 内面 茶色	長石少量	良	ロクロ成形 内面全体茶色の釉 点状にこげ茶色の釉 口縁より灯芯の稜は低い 外面に重ね焼きの痕跡 外面 体部ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り 内面 ナデ	19C 瀬戸・美濃
2	陶器 灯明皿	口径 (9.2) 器高 2.0 底径 3.6	2/3	外面 茶褐色 ~灰褐色 内面 茶色	長石少量	良	内面全体茶色の釉 点状にこげ茶色の鉄釉 外面 体部ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り 内面 ナデ	19C 瀬戸・美濃
3	古銭 寛永通宝	直径 2.2 厚さ 0.1	完形	-	-	-	重さ 1.3 g	新寛永
4	古銭 寛永通宝	直径 2.4 厚さ 0.15	完形	-	-	-	重さ 2.8 g	新寛永
5	古銭 寛永通宝	直径 2.3 厚さ 0.1	完形	-	-	-	重さ 1.9 g	新寛永
6	古銭 寛永通宝?	直径 2.4 厚さ 0.11	完形	-	-	-	重さ 1.5 g	
7	古銭 寛永通宝?	直径 2.4 厚さ 0.13	完形	-	-	-	重さ 1.7 g	
8	古銭 寛永通宝?	直径 2.3 厚さ 0.12	完形	-	-	-	重さ 2.5 g	
9	古銭 寛永通宝?	直径 2.3 厚さ 0.19	完形	-	-	-	重さ 2.7 g	
10	土師質土器 目皿か	口径 - 器高 3.1 底径 -	小破片 口縁片 ~底部片	橙褐色	金雲母多量 黒色粒少量 赤色スコリア少量	普	外面 口縁~胴部横ナデ 底部ナデ 内面 口縁~胴部横ナデ	底面に孔あり
11	土師質土器 焙烙	口径 (37.4) 器高 4.6 底径 -	小破片 口縁片 ~底部片	暗橙褐色	金雲母多量 長石多量 黒色粒少量	普	外面 口縁~胴部横ナデ 底部ナデ 内面 口縁~胴部横ナデ	源法寺焼 17~18C 内耳の痕跡

## 6. 1号土坑・2号土坑 (第17図)

### 1号土坑

検出地区 C-4Gに所在する。

遺構 1号溝状遺構と重複する。土層の観察から溝より1号土坑が古い。長軸2.4m×短軸1.8m、深さ1.5mの規模を測る。平面は不整な楕円形で、底面は中央やや北よりの部分が最も低く、そこからゆるく傾斜し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる円柱状の形態である。

覆土 5層に分層できる。暗褐色土を主体とし、ローム・炭化物が含まれる層が観察できたので人為的堆積の可能性がある。

遺物 出土しなかった。

所見 溝以前に単独で存在し、掘り込みが1.5m以上の円柱状の土坑形態であったので、墓坑の可能性がある。

### 2号土坑

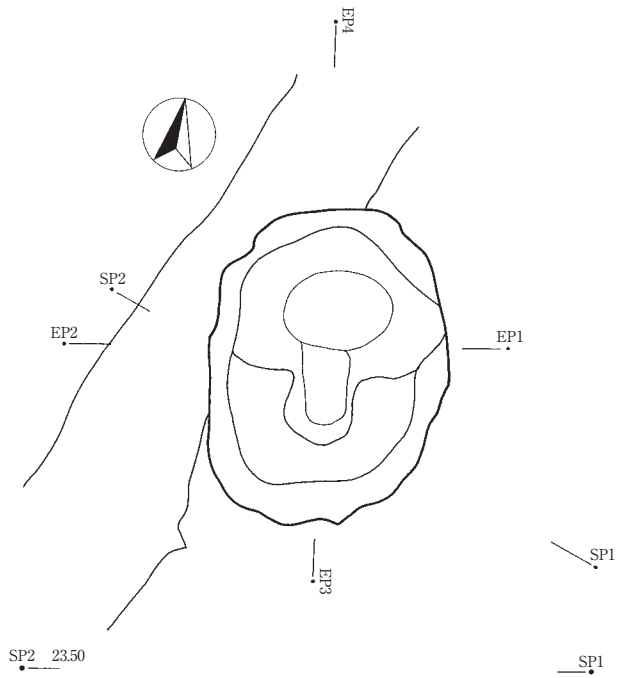
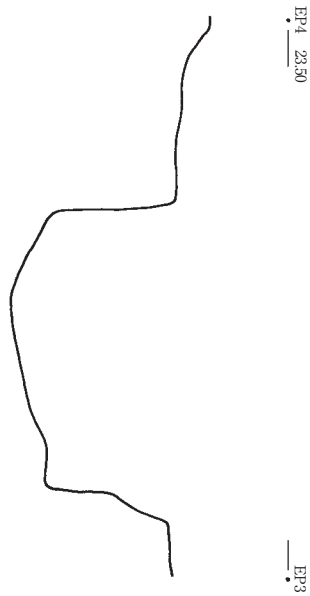
検出地区 K-2Gに単独で所在する。

遺構 長軸1.7m×短軸1.1m、深さ0.5mの規模を測る。不整な楕円の平面形態であり、底面はほぼ平坦な面である。掘り込みは直線的にたちあがり、逆台形の断面形状を呈する。

覆土 3層に分層できる。暗褐色土を主体とした自然堆積が観察できた。

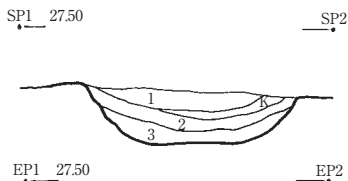
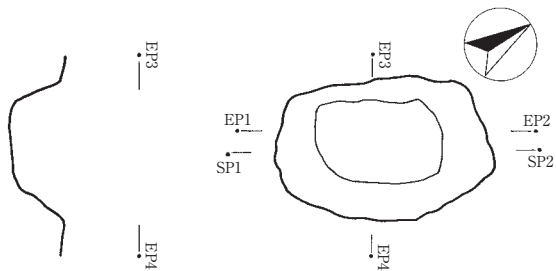
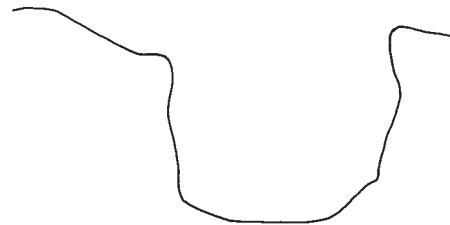
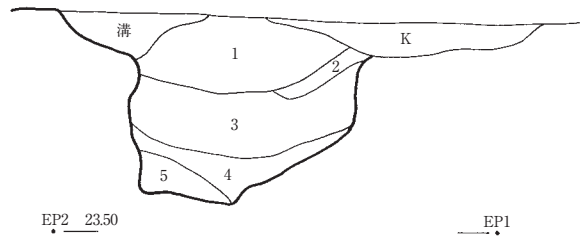
遺物 出土しなかった。

所見 用途・時期ともに不明である。



- 1号土坑
- 1層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、ごく少量のロームとごく少量の炭化物を含む。全体にやや灰色が効かっている。粘性非常に弱い。縮まり強い。
  - 2層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、少量の黒色土がにじむように混ざる。粘性非常に弱い。縮まり強い。
  - 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、径5mm程度のロームと炭化物をそれぞれ少量含む。粘性非常に弱い。縮まり強い。
  - 4層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、多量のロームと少量の炭化物を含む。粘性非常に弱い。縮まり強い。
  - 5層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とし、少量の黒色土と少量の炭化物を含む。粘性非常に弱い。縮まり強い。

[1号土坑]

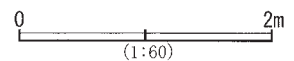


- 2号土坑
- 1層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に、ごく少量の黒色土がにじむように混ざる。少量のローム、焼土粒子を含む。粘性弱い。縮まり弱い。
  - 2層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に、少量の黒色土がにじむように混ざる。少量のローム含む。粘性弱い。縮まり弱い。
  - 3層 暗褐色土層 暗褐色土を主体に、少量の黒色土と少量のロームがにじむように混ざる。粘性弱い。縮まり弱い。

[2号土坑]

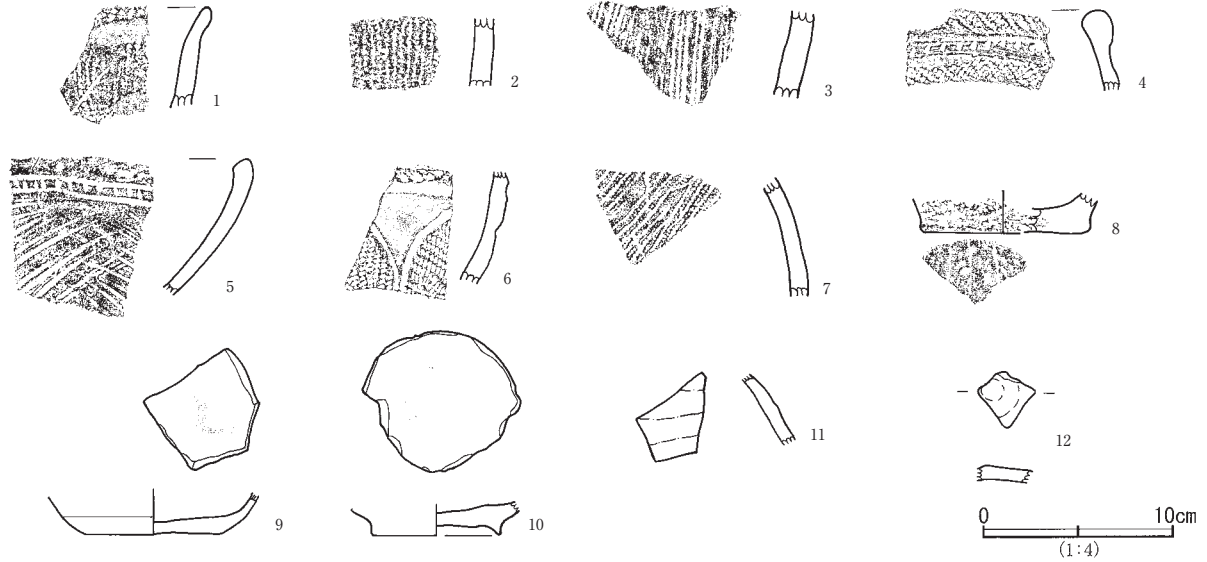


第17図 1号土坑 2号土坑



#### 第4節 遺構外 (第18図)

遺構の時期にともなわない出土、グリッド取り上げ、表採などからの出土した縄文・弥生・土師器・須恵器を一括で掲載した。出土した土器は、縄文早期、後～晩期、弥生後期、歴史時代の各時期であり、継続する土器の出土傾向は認められない。



第18図 遺構外

表7 遺構外 遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	縄文 深鉢	口径 器高 底径 (4.0) - -	口縁片	暗褐色	-	普	口縁外反気味に肥厚 外面 口唇RL縄文 口縁部直下に無文帯 胴部中位RL縄文 内面 口縁横位のケズリ	1号住覆土中 燃糸文 井草Ⅱ
2	縄文 深鉢	口径 器高 底径 - - -	胴部片	暗赤褐色	-	普	外面 胴部上半LR縄文	4号住覆土中 燃糸文 井草Ⅱ
3	縄文 深鉢	口径 器高 底径 - - -	胴部片	外面 暗褐色 内面 黒褐色	-	普	外面 胴部下半縦位の絡条体条痕	4号住覆土中 燃糸文 井草～夏島
4	縄文 注口土器	口径 器高 底径 - - -	口縁片	橙褐色	-	普	口縁RL縄文施文後、沈線による区画 沈線の下を棒状工具で連続刺突 胴部RL縄文	4号住覆土中 加曾利B
5	縄文 浅鉢	口径 器高 底径 - - -	口縁片	橙褐色	-	普	口縁直下沈線2条 沈線間を棒状工具で連続刺突 胴部上半斜位条線	3号住覆土中 加曾利B
6	縄文 浅鉢	口径 器高 底径 - - -	口縁～ 頸部片	外面 暗褐色 内面 黒色	-	普	口縁直下を連続刺突し、その下を沈線で区画 胴部上半RL縄文施文後、沈線で区画 内面 丁寧なミガキ	溝覆土中 後～晩期
7	弥生 甕	口径 器高 底径 - - -	胴部片	外面 淡褐色 内面 赤褐色	-	普	胴部上半 附加条縄文(1種)	2号住覆土中 後期
8	弥生 甕	口径 器高 底径 - - -	底部片	外面 赤褐色 内面 黒褐色	-	普	胴部下端RL縄文 底部木葉痕	2号住覆土中 後期
9	土師器 坏	口径 器高 底径 - 2.3 7.2	底部片	淡橙褐色	赤色スコリア微量 金雲母多量	普	ロクロ成形 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ→粘土貼り付け→ナデ 内面 体部下端密なヘラミガキ	3号住覆土中 墨書「  」 明確ではない
10	土師器 高台付皿	口径 器高 底径 - 1.8 7.9	底部片	明褐色	赤色スコリア微量	普	ロクロ成形 外面 回転糸切り→高台作り出し 内面 密なヘラミガキ	墨書 「  」 体部内面
11	灰釉陶器 長頸壺	口径 器高 底径 - (3.6) -	頸部片	外面 緑灰色 内面 灰色	黒色砂粒多量	良	ロクロ成形 内面 ナデ	東海産
12	須恵器 蓋	口径 器高 底径 - - -	小片	外面 灰色 内面 緑灰色	精選された胎土	良	ナデ	つまみ部

## 第3章 成果と課題

権現後遺跡の整理を終え、以下、時代を追って成果と課題を中心に若干の考察を試みたい。

### 第1節 縄文時代

遺構に関しては、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物に関しては、調査区が狭小な為、全体の出土量は少ないものの、遺構内の覆土中から若干の縄文土器が出土した。早期（1）の土器として井草Ⅱ式の口縁片を検出し、加えて一片であるが、絡条体条痕を施した井草～夏島にかけての土器を検出することができた。前期の土器の出土がなく、後期の土器が数点出土した。これらの状況は、「(財)千葉県文化財センターによる調査」（以下、「センター調査」と略）で出土した縄文土器と同じ出土傾向となった。

権現後遺跡の縄文時代の状況としては、遺構検出は無かったものの、早期～後期の間に出土遺物があり、早期撚糸文期と後期の段階に僅かなピークがあり、前期段階では希薄な状況になったといえる。権現後遺跡より台地のやや奥まった地点に隣接するヲサル山遺跡では、早期の条痕文期と中期段階にピークがあり前期段階では希薄な状況が窺える。権現後遺跡を含む萱田遺跡群では、早期にピークがあり、前期に衰退しているといった類似した状況がある。

更に早期の状況を見ていくなら、八千代市の早期の遺跡には、保品・神野地区に稲荷台式を中心に撚糸文期の土器を多く出土した上谷遺跡、撚糸文期後半の花輪台式、平坂・天矢場式を比較的多く出土した向境遺跡がある。条痕文期の炉穴および条痕文系土器が集中して出土する遺跡と同じく上谷遺跡、島田地区の間見穴遺跡などがある（2）。いずれも印旛沼沿岸に立地する遺跡で、印旛沼に対してやや奥まった地点に位置する萱田遺跡群とは立地を異にする。遺構の検出数、遺物の出土量ともに印旛沼沿岸域の諸遺跡の方が優り、萱田遺跡群において、撚糸文期後半の遺物の出土が少ないことに対して、印旛沼沿岸域の諸遺跡は、花輪台式など撚糸文後半期の土器も出土していることも対照的である。また、八千代市の早期遺跡の特徴として沈線文期の遺跡が少ないことが特徴として挙げられる。

印旛沼沿岸域の諸遺跡と萱田遺跡群の縄文時代を比較する時、沈線文期の評価をどのようにするかという問題が残るが、八千代市内における縄文時代早期にあっては印旛沼沿岸域に早期遺跡の集中地点があり、撚糸文期前半には領域を拡大し、後半に縮小、条痕文期に再び拡大しているといえる。そうした状況が印旛沼からやや奥まった萱田地区に波状的に及び、萱田地区における撚糸文土器と条痕文土器の出土の違いとして表れているのではないだろうか。

前期にあっては、萱田遺跡群を通して縄文時代前期の痕跡が少ないが、大和田新田に黒浜式を中心とするライノ作南遺跡、上高野地区に浮島式を中心とした新林遺跡など、市内の全く別の地域に核となるべき遺跡が点在している。早期に見られた拡大・縮小の現象では律することができない。縄文前期に起きたとされる小海進なども当然その一つと思われるが、遺跡立地に別の原理が働いているのであろう。

### 第2節 弥生時代

出土遺物としては、住居覆土中から胴部片と底部片が2片出土したのみであった。いずれも附加条（第1種附加2条）縄文を施した胴部片で、詳細な時期・系統については不明である。

今回の調査地区については「センター調査」の弥生時代第2群に隣接する位置にある。今回の調査区において弥生時代の遺構が検出されなかったことは、弥生時代第2群の集落が「センター調査」の時点で、ほぼ完結

した姿であったことを示している可能性が高い。また、弥生時代第1群が弥生時代後期南関東系土器を主体に出土している集落に対して、第2群が輪積痕系土器を比較的多く出土していることから、出土した土器も白井南遺跡群で見られた輪積痕+胴部附加条縄文の系統の土器である可能性が高い。

### 第3節 古墳時代

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒が調査された。特に2号住居跡からはカマド周辺で良好な一括資料に恵まれた。2号住居跡を中心に出土土器を概観する。甕の特徴としては、口縁が「く」の字状に外反し、やや長胴化した球形の甕で胴部はヘラケズリ調整を施す。在地に特徴的な甕が主体的に出土している。坏に関しては須恵器の蓋形の模倣坏を主体に出土し、客体的に有段口縁坏を出土していた。また、高杯が器種構成に加わっていないこと、須恵器の出土がないことなどが特徴に挙げられる。

有段口縁坏の存在、高杯が器種構成から落ちていることなどを踏まえうえて、先行研究の編年に当てはめれば、小沢6期、長谷川Ⅳ期（平賀Ⅴ期）に相当し、八千代市内の遺跡に対応させると内込遺跡第2期に相当するであろう（3）。古墳時代後期の中でも半ばから後半期にあたる、6世紀後半から7世紀前半に相当すると考えられる。

「センター調査」では、古墳時代後期の遺構が2つの遺構群として検出され、集落を3期区分している。第Ⅱ群が第1～3期の8軒、第Ⅰ群が第3期を中心に今回の調査例を加え合計5軒で構成される集落展開となる。今回の調査区は、「センター調査」における古墳時代第Ⅰ群の延長部に相当するので更に調査区外に遺構群が広がっている可能性が高い。今回調査された3軒の出土土器は、いずれも「センター調査」第Ⅰ群の住居群出土の土器と類似していることから第3期の集落に相当すると思われる。従って第3期の集落は5軒以上で展開する見通しが立つ。

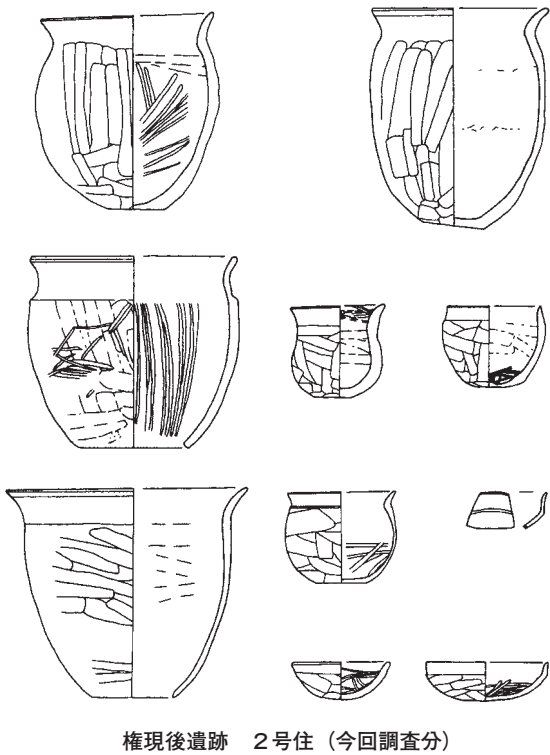
八千代市内における古墳時代後期の集落遺跡の調査報告例は比較的少なく、向境遺跡で3軒、内込遺跡で19軒があり、権現後遺跡は今回の調査例を加えて13軒である（4）。古墳時代後期の集落はしばしば大集落を形成するイメージがあるが、八千代市においては内込遺跡での19軒を別にすると概ね、小規模の集落展開を見せている。周辺遺跡と比較しながら権現後遺跡の集落展開について少し考えてみたい。権現後遺跡第Ⅰ群の8軒は3期程度に区分が可能なこと、1時期に存在した住居は3軒前後と考えられる。そこで注目されるのは向境遺跡の集落展開である。権現後第Ⅰ期とされる住居の出土土器群は、向境遺跡出土の遺物に類似しておりほぼ同時期で、カマド導入直後の状況と考えられる。また、両遺跡とも古墳時代中期の住居群と隣接しながら展開している状況も近似している。両遺跡の状況からカマド導入直前、直後の中期末～後期初頭にあつては、3軒前後の住居が単位となって散在して集落を形成している状況が見えてくる。一方、今回の調査された第Ⅱ群の集落は、権現後遺跡の後期第Ⅰ期集落や向境遺跡とは違いやや時期を新しくする。集落の規模も5軒以上で展開する可能性を秘めている。この権現後第Ⅱ群（第3期集落）と同時期の集落として内込遺跡の024Dを中心とした第2期集落が挙げられる。内込第2期では11軒の竪穴住居跡を検出し集落として最も大きく展開している時期である。古墳時代後期初頭において3軒前後で単解した集落が、この時期に両遺跡ともに集落の規模がやや拡大している。出土土器による詳細な検討が必要なことは言うまでも無いが、八千代市の古墳時代集落展開の1類型として検討を進めていきたい。

集落の展開に関連して、注目される住居跡として3号住が挙げられる。床面直上から碗型鉄滓が出土している。床面が著しく赤化していることも無関係ではないように思える。集落内で小鍛冶が行われていた可能性があり、古墳時代に遡る鍛冶関連の遺構として好例になるであろう。

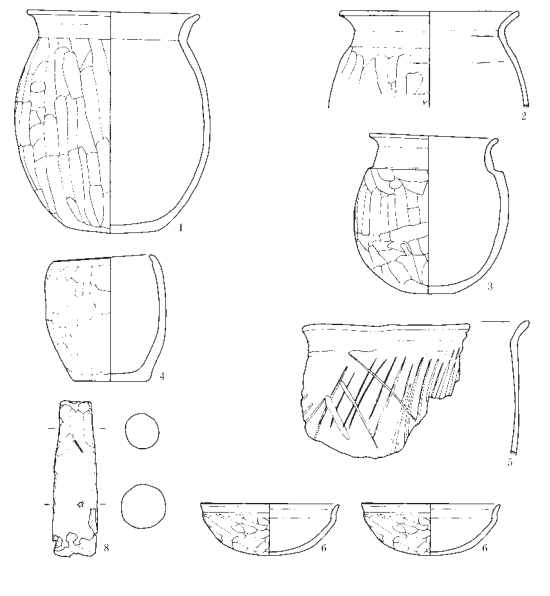
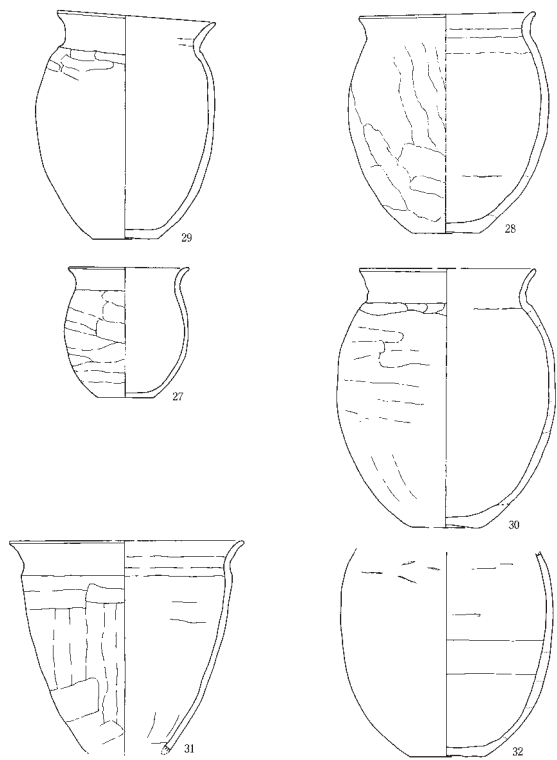
最後に4号住出土の貝のことについて若干触れておきたい。4号住覆土内からハマグリを中心とした貝ブロッ



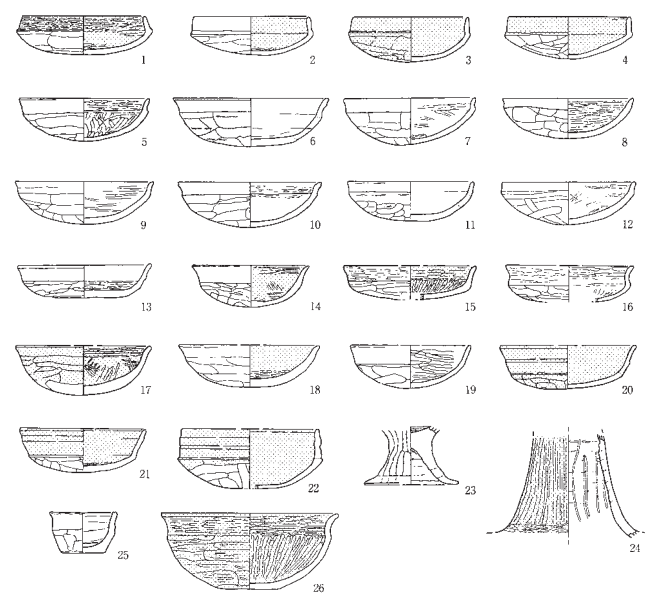
クが検出されたわけであるが、「県センター」調査の報告書に飯綱神社敷地内に散布していたとの記述がなされ、「県センター」調査地区外に遺構の広がりの可能性を示唆している。この記述はまさに、今回の調査の予見となり、散布していた貝は恐らく4号住覆土内出土の貝に関連するものであろう(5)。



権現後遺跡 2号住 (今回調査分)



権現後遺跡 D008



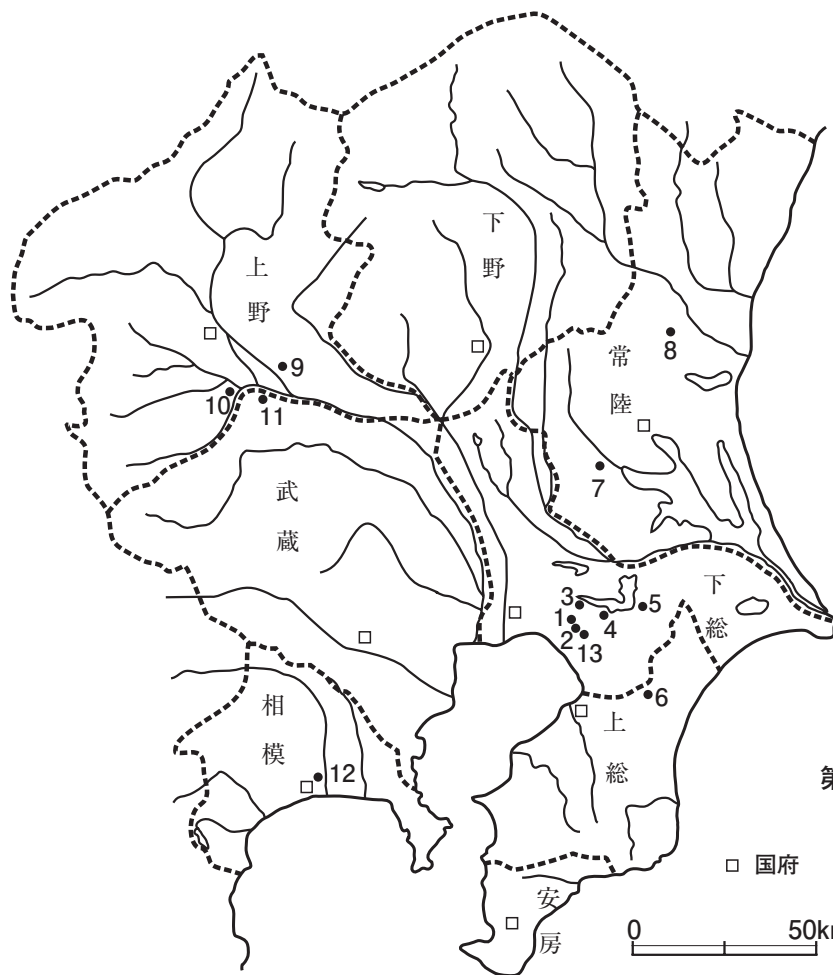
内込遺跡 24D

第19図 2号住居跡同時期資料 (S=1/8)

#### 第4節 奈良・平安時代

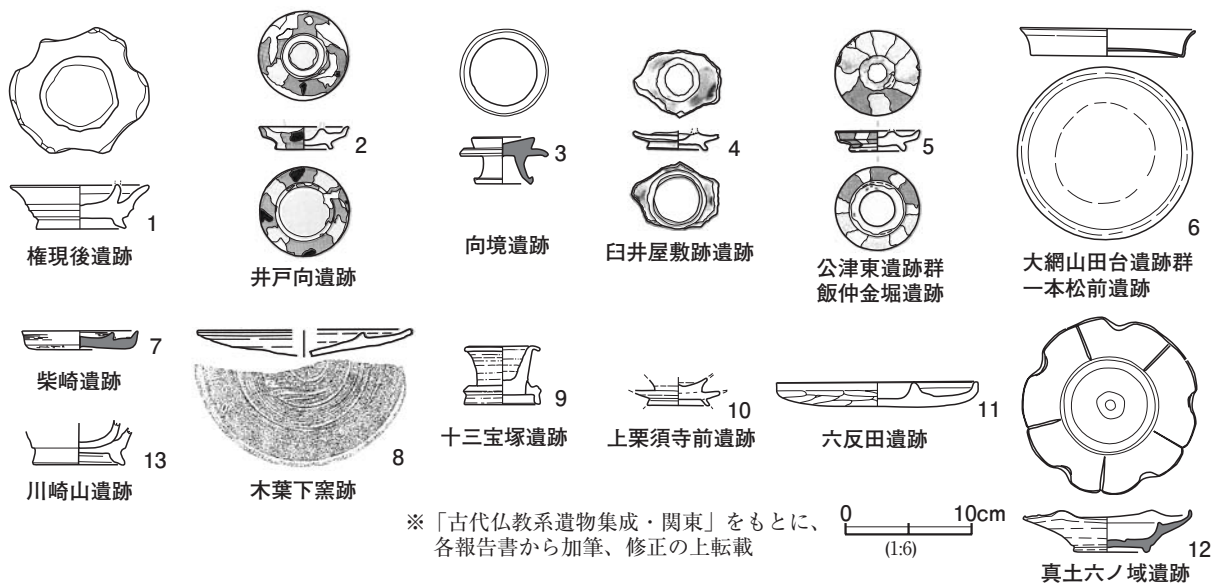
今回の調査では、およそ1,000㎡の範囲内から奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒が調査された。住居跡の平面はややいびつな方形で、住居の掘り込みも浅くしっかりとした柱穴ではなく、硬化面もはっきりしない長期間の定住生活を感じさせない印象をうける。遺物の主体となる土師器坏は、ロクロ成形で口唇部が若干外反する特徴が見られた。8の土師器坏底部内面線刻および体部外面墨書のクローバー状にみえる記号は「センター調査」の権現後遺跡でもD022、D023、D041の3遺構から出土し、いずれも土師器坏体部外面に墨書されている(6)。1号住居跡出土のものは、線刻したあとさらに墨書が描かれ、土器に対して何らかの再確認の行為があったことを窺わせる。「吉祥」の文字が墨書された6土師器坏は、カマド掛口の18土師器甕、カマド内17土師器甕と関連し、「掛口を塞いで二度と使用することがない意志表示」(7)を表しているだろう。仏具は、19土師器托、20土師器仏鉢が共伴して出土した。権現後遺跡の「センター調査」範囲は、17,200㎡であり、奈良・平安時代の遺構、竪穴住居跡68軒、掘立柱建物跡23棟、方形周溝状遺構2基、土師器焼成窯7基などが調査された。調査結果から住居群にはまとまりのある分布状況が認められ南からI群、II群、III群、IV群に分けている。1号住居跡は、台地南縁辺に展開するI群に属し、その中でも距離において単独で南端に位置し、他に奈良・平安時代の住居跡は検出されなかった。このことは、調査区東側、現在の飯綱神社の周辺には、住居跡の分布が希薄であることが推察できる。権現後遺跡報告書段階では、①非ロクロ土師器坏、②土師器坏と須恵器坏の出土比率・大小の区別、③皿型土器の出現を指摘している。藤岡孝司氏は「センター調査」の結果に基づき、萱田遺跡群の土器編年の試案を提示した(8)。1号住居跡出土遺物を検討すると、供膳形態において、須恵器が激減し土師器が9割を占め、「箱型ロクロ土師器」に後続し口唇部が外反する土師器坏が見られ、内面黒色処理された土師器坏が出現するIII期に想定できる。III期の実年代は、8世紀第4半期に比定され権現後遺跡I群の中でも古い位置付けができるであろう。

県内では、7世紀代後半の上総大寺廃寺と下総竜角寺が建立されたことを契機とし、国分寺造営までに多くの初期寺院が造営され、8世紀代後半～9世紀代にかけて仏教関連の遺構遺物の検出が増加する(9)。仏具は①梵音具②荘厳具③供養具④僧具⑤密教法具に分類され、僧具としての鉄鉢は僧侶が食物のお布施を受けるとき用いる鉄製の鉢である。鉄鉢を供養具として使用する場合には托(鉢支、はっし)とともに用いるとされるが、出土例が格段に少ないことから木製の托が大半であった可能性も高い。関東において鉄鉢形土器の分布には、上野南部、下野南部、武蔵中央部、上総・下総国境、下総印旛沼周辺に集中し、丸底のものから8世紀代尖底に変化しその後、再度丸底形態になるとされている。萱田遺跡群の中で仏教の受容は白幡前遺跡を核とし、同心円状の広がりを見せ、井戸向・北海道遺跡へ希薄となる(10)。市内で托が確認できた井戸向遺跡D147は三彩小壺、銅製鈍尾、燧金、燧石、向境遺跡A032では、鉄鉢形須恵器、赤彩土器、「寺」の墨書土器、川崎山遺跡D-4グリッド出土では、墨書土器など比較的仏教関連遺物を伴い出土している。托は鉄鉢形土器の分布とほぼ重なり、権現後遺跡の托は、どのような特徴が見られるのか関東出土の托と比較するための大まかな集成を行った。①奈良三彩はほぼ同規格の製品である。②須恵器・土師器は共通する要素は認めがたい。③豊かな装飾が灰釉陶器には見られる。以上3点が集成結果から抽出でき、向境遺跡・十三宝塚遺跡のように受け部または高台部が高さを有するものを立体型、外側口縁と受け部口縁がほぼ同じ高さのものを扁平型と便宜的に設定した(11)。今回托と鉄鉢形土師器がセット関係出土し、2須恵器転用硯、6「吉祥」、10渦巻きの墨書、9灯明皿の出土は、識字人物の存在が浮かび上がる。東金市久我台遺跡、同市作畑遺跡では、僧名の可能性のある「弘貫」の墨書土器が検出され、寺院以外での僧尼の活動が確認できる。1号住居跡にも、「弘貫」に類する僧尼が起居していた様相が捉えられた。



1. 権現後遺跡
2. 井戸向遺跡
3. 向境遺跡
4. 白井屋敷遺跡
5. 公津東原遺跡群  
(飯仲金堀遺跡)
6. 大網山田台遺跡群  
(一本松前遺跡)
7. 柴崎遺跡
8. 木葉下窯跡
9. 十三宝塚遺跡
10. 上栗須寺前遺跡
11. 六反田遺跡
12. 真土六の域遺跡
13. 川崎山遺跡

第20図 関東托出土遺跡分布



第21図 関東出土托集成

No.	遺跡名	種別	出土遺構	時期	備考
1	権現後遺跡	土師器	1号住居跡	8世紀後半	扁平型 土師器鉄鉢型土器、「吉祥」
2	井戸向遺跡	奈良三彩	D147住居跡	9世紀初頭	扁平型 三彩小壺、銅製鉞尾、燧鉄
3	向境遺跡	須恵器	A032住居跡	8世紀後半	立体型 須恵器仏鉢、「寺」、赤彩
4	白井屋敷遺跡	奈良三彩	15号住居跡	9世紀初頭	扁平型 墨書土器
5	公津東遺跡群 (飯仲金堀遺跡)	奈良三彩	2号住居跡	8世紀後半	扁平型
6	大網山田台遺跡群 (一本松前遺跡)	銅製	H046B住居跡	9世紀	扁平型 遺物少ない
7	柴崎遺跡	須恵器	165号住居跡	9世紀前半	扁平型 遺物少ない
8	木葉下窯跡	須恵器	A地点灰原	8世紀前半	扁平型 須恵器窯跡
9	十三宝塚遺跡	奈良三彩	V A号土坑	9世紀前半	立体型 遺物集中土坑
10	上栗須寺前遺跡	須恵器	24号溝	奈良・平安	扁平型 溝は中近世
11	六反田遺跡	土師器	4号住居跡	古墳後期か?	扁平型 ヘラケズリ、炭素吸着
12	真土六ノ域遺跡	灰釉陶器	土坑	10世紀前半	扁平型 遺物集中土坑、装飾性豊か
13	川崎山遺跡	土師器	D-4グリッド	平安時代	扁平型 遺物少ない



- …古墳時代後期
- …奈良・平安時代
- …今回の調査区

第22図 権現後遺跡・菅地の台遺跡 遺構配置

## 第5節 近世

今回実施した調査範囲において、遺構として溝状遺構1条と土坑2基を検出した。溝からは、19世紀代の陶器・磁器・土師質土器などが総重量5.7kg出土し、製品の産地ごとに割合を算出し円グラフを作成した。遺物は、碗・湯のみ碗・皿・徳利・播鉢・片口鉢・焙烙・灯明皿など生活に使用する器種が見られる。産地は、瀬戸・美濃、肥前、源法寺、堺、信楽、志戸呂、不明に分類できる。図示した灯明皿の組合せは何組か認められ、瀬戸・美濃の規格製品であった。当時、灯明皿は、瀬戸・美濃と信楽で多く焼かれ、同程度の割合で遺跡から出土する事例が多いが本遺跡では、瀬戸・美濃製品のみ出土であった。出土したほとんどの遺物は、溝状遺構の中層から上層にかけての覆土から出土し、埋没過程の途中で一括廃棄された状況が想定できる。八千代市内で初めて出土が確認された源法寺焼の焙烙は、器高4.6cm、復元口径37.4cmを測り、扁平で内耳が底部につく、金雲母が混入する特徴的な胎土を有する。茨城県真壁市で製作された源法寺焼が、八千代市内で出土したことは、源法寺焼の流通の一端が確認できる資料となった。源法寺焼は17～19世紀代に出土する遺物であるが、本遺跡の場合、出土状況から19世紀代に他の遺物とともに廃棄されたものであろう。

溝状遺構は、南北方向にのびており、現在の飯綱神社北参道口の現道とほぼ重なる。溝状遺構は、遺物の廃棄以前に、本遺跡東に隣接する飯綱神社を台地から区画するよう掘削・機能していた可能性が高い。現道とほぼ重なるので、参道として使われていたとも考えられる。

飯綱神社は、現在、本殿・拝殿・幣殿・鐘楼・南参道石段により構成されている。神社創建の年代は、諸説があり実態は明らかでないが、神社にかかわる年代を示す資料として、本殿の再建と南参道石段改修の記録が残る。本殿の再建は、建物の由緒・工事年月日・施主・工匠などを棟木に打ち付ける棟札に安政3（1856）年と記されていた。石段の改修は、石段が大破したため改修の寄付を募る「石階再建勘化帳」の史料に天保3（1832）年の記載がされている。本殿の再建・石段改修の時期と溝出土の遺物の時期は、ともに19世紀代であり、出土遺物は、神社の修復に伴う廃棄品であろう（12）。

八千代市内では、近世の遺跡として北裏畑遺跡・高津新田野馬堀遺跡・赤作遺跡などが挙げられる。遺構が検出された遺跡として、高津新田野馬堀遺跡では「牧」に関わる溝、赤作遺跡では土坑壙と溝状遺構が確認された。権現後遺跡以外では遺物の量が少なく、遺構の時期も特定が難しい。遺物がまとまった量出土し、その時期と産地構成が明らかになった資料が権現後遺跡では得られた（13）。

今回、中世に遡る遺構・遺物は検出されなかった。遺跡周辺には、太田道灌が佐倉市臼井城攻略の際、現飯綱神社境内に陣を張ったとされる伝承が残っている。対岸の米本城や米本城周辺遺跡に、中世に遡る遺構・遺物が検出されていることを考えると、現飯綱神社本殿真下に遺構がある可能性は指摘できる。

### 註

- (1) 時期区分の問題であるが、本報告では捩糸文期から早期とする。
- (2) 以下、記述される遺跡の報告書については、第1章の参考文献を参照されたい。
- (3) 出土土器の年代観については下記文献を参考とした。

糸川道行 1997「房総の有段口縁杯・比企型杯」『古代』104 早稲田大学考古学会

長谷川厚 1991「古墳時代後期土器の研究（3）—房総地域の諸相について—」

『神奈川考古』27 神奈川考古同人会

小沢 洋 1995「房総の古墳時代後期土器—杯の変遷を中心として—」『東国土器研究4』

東国土器研究会

- 森 竜哉 2003「第3章 まとめ」『内込遺跡b地点発掘調査報告書』
- (4) 他に北海道遺跡で7軒、井戸向遺跡で8軒がある。
- (5) 散布していた貝については、1号溝から出土していた貝ブロックの可能性も考慮にいれなければならない。
- (6) 他にも「センター調査」白幡前遺跡D185遺構から同様の墨書土器が出土している。
- (7) 小林清隆 1989「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号 (財)千葉県文化財センター
- (8) 藤岡孝司 1990「八千代市萱田遺跡群の歴史時代土器」『研究連絡誌』第30号 (財)千葉県文化財センター
- (9) 関東地方の仏教関連遺物の出土要因を探る論考は、数多く発表され以下を参考にした。
- シンポジウム 1994『古代東国仏教の源流』新人物往来社
- 大野康夫 1998「八千代市井戸向遺跡出土の三彩陶器」『研究連絡誌』第26号 (財)千葉県文化財センター
- 坂詰秀一他 1999「出土仏具の世界」『考古学論究』第5号 立正大学考古学会
- 大野康夫 1998「八千代市井戸向遺跡出土の三彩陶器」『研究連絡誌』第26号 (財)千葉県文化財センター
- 千葉県 2004『千葉県の歴史 資料編 考古3』(財)千葉県資料研究財団
- 千葉県 2004『千葉県の歴史 資料編 考古4』(財)千葉県資料研究財団
- 小林信一他 1998『千葉県文化財センター研究紀要18』(財)千葉県文化財センター
- 田中広明他 1997『中堀遺跡－御陣場川堤調整池関係埋蔵文化財調査報告－』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 資料集 2003『古代の社会と環境 遺跡の中のカミ・ホトケ』帝京大学山梨文化財研究所
- 雨宮龍太郎 1983「古代村落と仏教－磁鉢をめぐる人々－」『研究連絡誌』第2号  
(財)千葉県文化財センター
- 宮田安志 1996「仏具出土集落の出現とその背景」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 阪田正一 1996「古代房総の民衆と仏教文化」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 池田敏宏 2003「8～9世紀の山野開発と「神」「仏」関連資料の盛行」『古代の社会と環境 考古学からみた古代の環境問題』帝京大学山梨文化財研究所
- 富永樹之 2006「東国の「村落内寺院」の諸問題－千葉県以外を主体として－」『在地社会と仏教』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 須田 勉 2006「古代村落寺院とその信仰」『古代社会の信仰と社会』国士舘大学考古学会
- 平川 南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- (10) 笹生 衛 2006「古代東国集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中心に－」『在地社会と仏教』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- (11) 托については、時間的制約から詳細な検討を加えることが出来ないため機会を改めて論じたい。
- (12) 八千代市教育委員会 2004『八千代市の文化財(9版)』  
八千代市市史編纂委員会 2005『八千代市の歴史 資料編 近世IV』
- (13) 八千代市教育委員会 2002『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』



完掘状況（北から）



遺跡遠景



基本層序



プラン検出状況（北から）



プラン検出状況（南から）



2号住 遺物出土状況



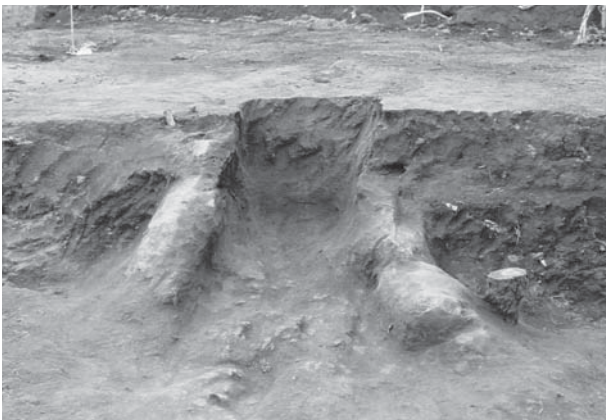
2号住 遺物出土状況 (左から7・8・4)



2号住 完掘状況



2号住 遺物出土状況 (左から7・8・10)



2号住 カマド完掘状況



1



2

3



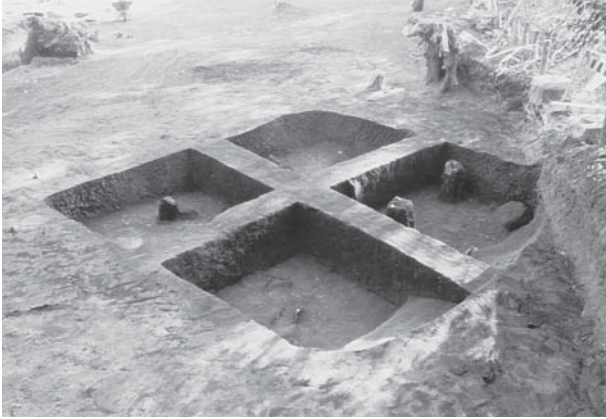
4

2号住 出土遺物





2号住 出土遺物



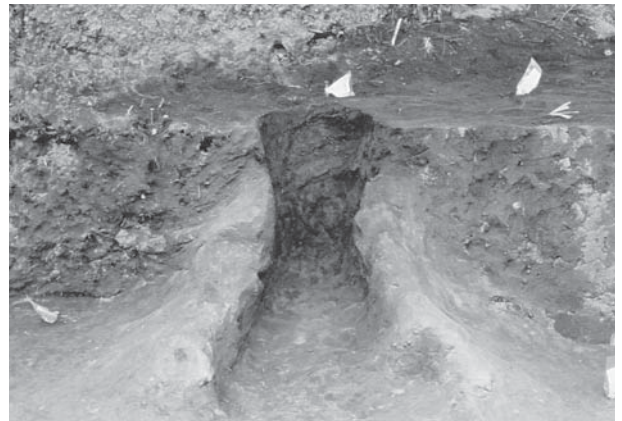
3号住 遺物出土状況



3号住 遺物出土状況



3号住 完掘状況



3号住 カマド完掘状況



1



2

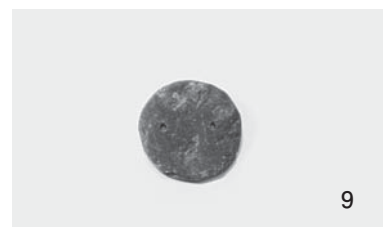


3



6

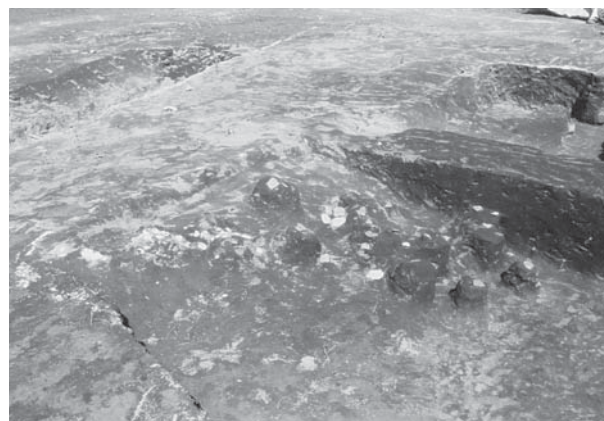
3号住 出土遺物



3号住 出土遺物



4号住 遺物出土状況



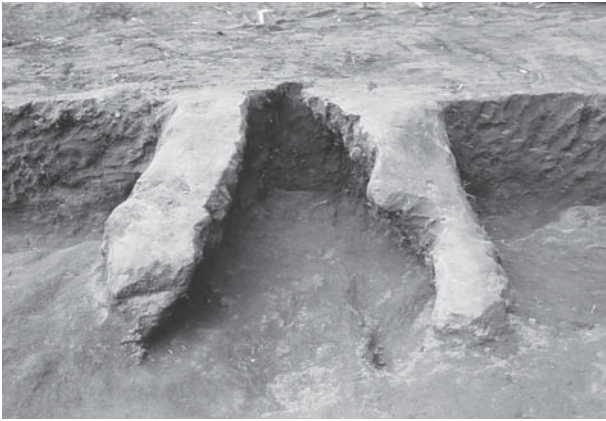
4号住 遺物出土状況



4号住 貝・焼土検出状況



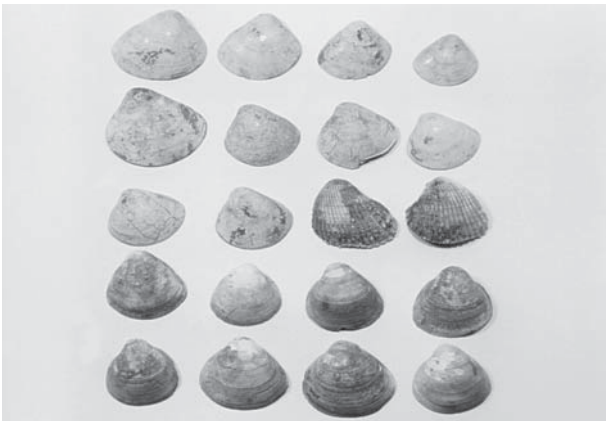
4号住 完掘状況



4号住 カマド完掘状況



4号住 第1貝層出土具



4号住 第2貝層出土具



3号住 出土遺物



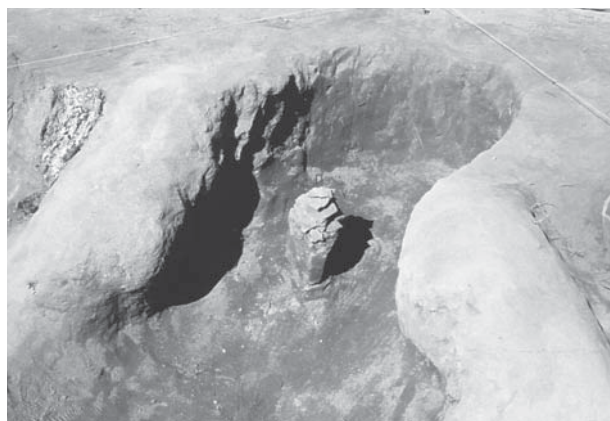
1号住 遺物出土状況



1号住 遺物出土状況



1号住 遺物出土状況



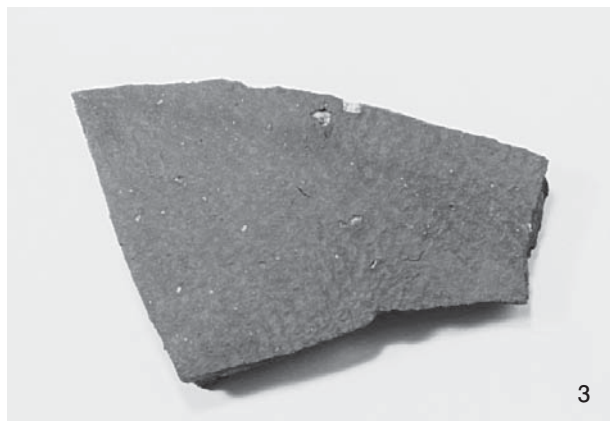
1号住 遺物出土状況



1号住 カマド完掘状況



1号住 完掘状況



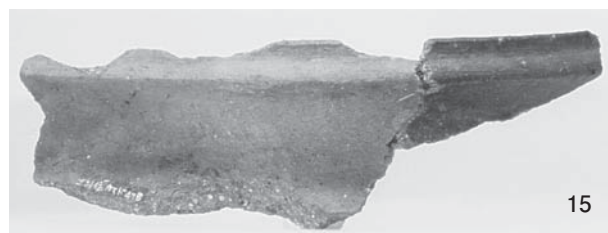
1号住 出土遺物



1号住 出土遺物



14



15



16



18



19



20



※托、鉄鉢形土器（手前 向境遺跡・奥 権現後遺跡）



1号土坑 完掘状況



2号土坑 完掘状況



1号溝 完掘状況 (北から)



1号溝 完掘状況 (南から)



1号溝 貝



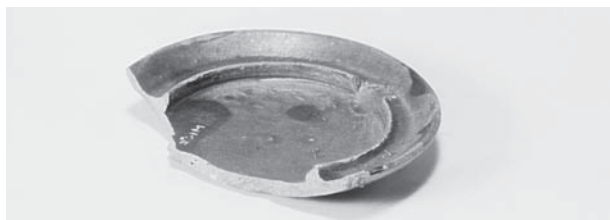
1号溝 遺物出土状況



1号溝 出土遺物



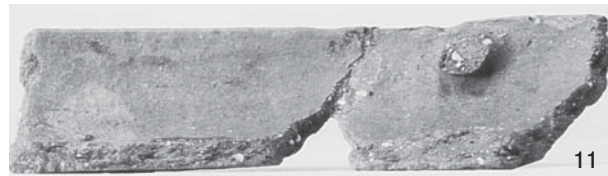




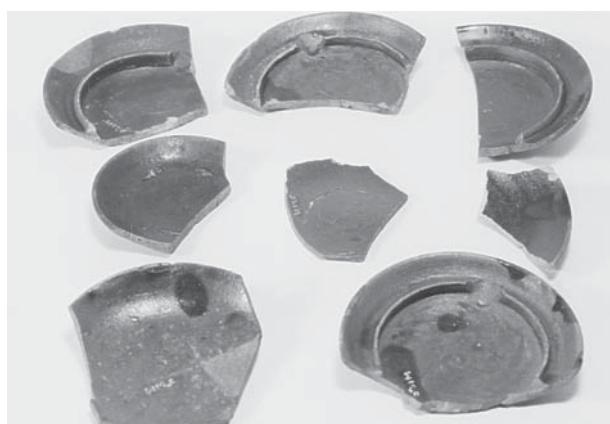
10



2



11



瀬戸・美濃 灯明皿



瀬戸・美濃



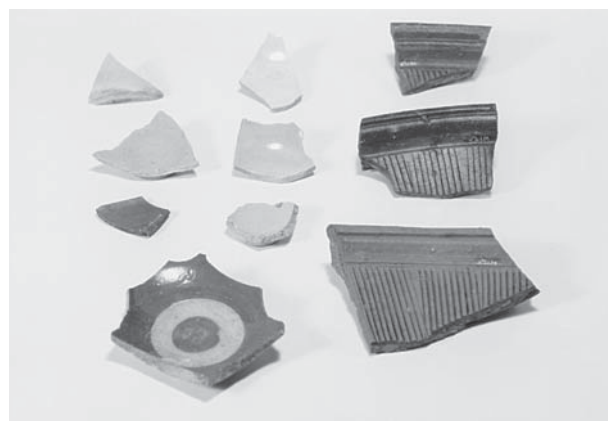
瀬戸・美濃



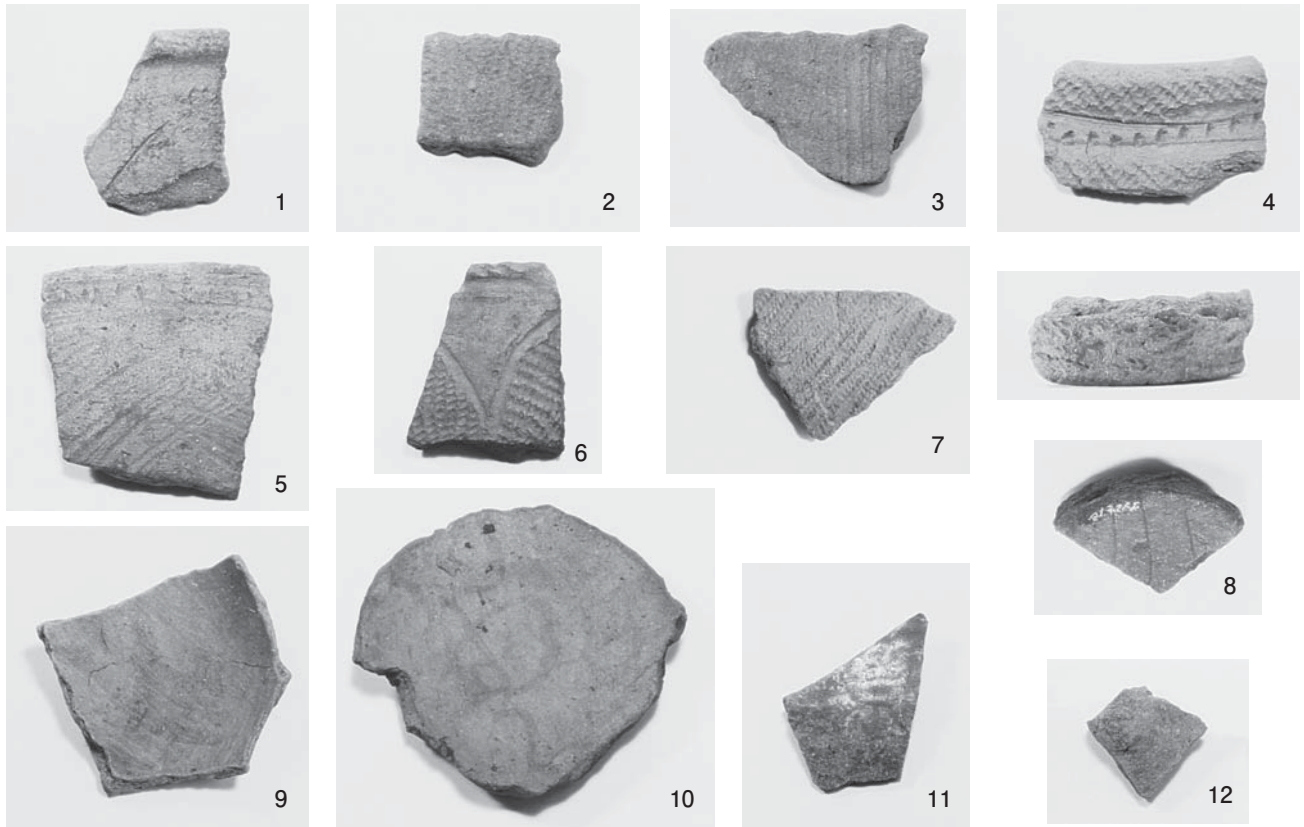
肥前



肥前



堺・信楽



遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし ごんげんうしろいせき -こうきょうじぎょうかんれんいせきはつつちょうさほうこくしょⅡ-							
書名	千葉県八千代市 権現後遺跡 -公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-							
編集者名	伊藤弘一 宮澤久史							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047(481)0304							
発行年月日	西暦 2007年 (平成19年) 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
ごんげんうしろいせき 権現後遺跡	やちよし かやだあざ 八千代市 萱田 字 ごんげんうしろ ほか 権現後 460-2外	12221	171	35度 44分 02秒	140度 06分 39秒	19950130 ～ 19950331	1020㎡	八千代市文化伝承館建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現後遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居 3軒	古墳時代土師器	(財)千葉県文化財センター調査区隣接地
		奈良・平安時代	竪穴住居 1軒	奈良・平安時代土師器	
		近世	溝 1条 土坑 2基	近世陶磁器・寛永通宝	

千葉県八千代市  
 権現後遺跡  
 -公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-  
 2007(平成19年)  
 印刷日 2007年 3月 23日  
 発行日 2007年 3月 30日  
 編集 八千代市教育委員会  
 〒276-0045 八千代市大和田138-2  
 TEL. 047-481-0304  
 発行 八千代市教育委員会